

---

# 童話と現実の世界～ 2つのスイッチ～

\*姫林檎\*

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

童話と現実の世界へ2つのスイッチへ

### 【Nコード】

N4323C

### 【作者名】

\* 姫林檎 \*

### 【あらすじ】

小さな子供がよく読む童話『赤ずきん』。私はその赤ずきんなんだ。いつ生まれたかなんてわからない。『生まれる』なんてことがあったのかもわからない。気がついたらここにいて赤ずきんを演じてた。誰か、どうかこの世界のスイッチを押してください・・・。

## 第1話 私は誰でしょう？（前書き）

ファンタジー小説です。

恋愛小説でもあるので、苦手な人はどうぞ回れ右を。  
更新が遅れることもあるので注意してください。

## 第1話 私は誰でしょう？

手には花の入ったカゴバック

頭はずきんをかぶってて

ひらひらスカートをはいている

そう 私は赤ずきん

童話の世界の赤ずきん

「何たそがれてんだ？」

ぼんやりと足元を眺めていた私に金髪で派手な顔つきの男が言う。

「別にたそがれてなんかないしー」

私はため息をついて返事をした。

性別は男というよりもオス。

人間というよりもオオカミ。

何もないこの世界

すべてが真っ白で何もない

「どうしてこんな世界に生まれてきたんだろう?」

「・・・生まれてきたのかどうかも謎だよな。気がついたらここにいたし」

狼がそういった瞬間、狼は目の前から消えた。

かわりに目の前に現れたのはキラキラした緑達。

私は森の中に立っていて、木でできた家のドアノブに手をかけていた。

いつもそう。

そしてドアを開いてベッドの中の人物に話しかける。

出てくるのはもちろんおばあさんなんかじゃなくて 狼。

そして狼に食べられる

いつもそう

いつもこうなる

毎回 どんな時も どうなっても

私がどうにかしたくても

## 第2話 童話の世界

目が覚めるとそこはいつも通り何も無い真っ白な世界だった。

が 急に狼の顔が現れた。

「大丈夫か？」

「大丈夫に決まってるでしょ！」

そう言っと思いい切り頭突きをすると狼はみっともない声をあげておでこをおさえた。

私はバカにしたように鼻で笑った。

「いてえええ・・・」

「痛くない！」

どうして私はこんなところにいるんだろう

話し相手は狼ぐらいしかいないし

いつだって私は赤ずきんだし

いつもいつも同じ展開だし

私は泣きたくなってきた、体操座りをした。

そう 私は童話の世界の中にいる

絵本の『赤ずきん』の世界の中にいる

どうしているのかわからない

気がついたらここにいて 赤ずきんを演じてた。

誰かが本を開くと周りは森になる

それまでは真っ白で私達しかいない無の世界なのに。

何度も逃げ出そうと思った

『おばあさんの小屋』なんかに構わず 森を走ろうって

でもできなかった

いつだって物語が始まれば体がいうことを聞いてくれなくなる

勝手に体が赤ずきんになって動き出す。

「赤ずきん？どうした？」

「どうもしない！」

私はそう言って立ち上がる。

「・・・なあ」



狼が私の背中に向かって言う。

「どうして俺はブロントで、お前は赤ずきなんだ？」  
「そんなの 知らない」

私に人間のような名前はない

でも狼には『ブロント』という名前があった

私は赤ずきん

名前なんてない

だって名づけられてないもの

狼は誰かが名づけたみたいだけど・・・  
ブロント

どうしてなのかわからない

でも 知りたくない

知ったら 私はこの世界の住人じゃないってことになりそうで

そうしたら 私はどこにいればいいのかわからなくなるから

よくわからないけど そんな気がする

「お前はあの話、まだ信じてるのか？」

<sup>フロント</sup>狼がまた私の背中に向かって話しかける。

返事なんて 誰かが絵本を開けばかき消されてしまうのに

「さあね。でも、信じてても信じてなくてもどうにもなんないよ」

私が返事をして狼の<sup>フロント</sup>ほつを振り返ると、<sup>フロント</sup>狼は眉間にしわを寄せて私を見ていた。

私はまた馬鹿にしたように鼻で笑った。

信じてたって信じてなくったって

自分がどうしたって変われないんだよ？

それなら どっちだっていいじゃん

信じてたら変わるならいくらだって信じるよ

### 第3話 2つのスイッチの話

そつえばいつだっただろう 赤ずきんのおばあさん役が言った。

『この世界にはね 2つだけスイッチがあるのよ』

私は初めこのおばあさん、この世界のせいで頭がおかしくなっちゃったんじゃない？なんて思った。

だけど

『1つのボタンが押されると、貴方は他の世界へ行くことができるの。物語の中じゃない自由の世界よ』

あの頃の私にとってその世界の住人がどれだけうらやましかったかわからない。

だけど とにかく惹かれたのを覚えてる。

ここじゃない世界

自由で 物語の鎖なんてない世界

その住人 その空 その森

すべてが魅力的に思えた

この世界の錆びた空も景色も見たくなかった

とにかく逃げ出したかった

だけど

『もう1つのスイッチはこの世界に引き戻されてしまうスイッチなの』

『その2つのスイッチが押されるにはキツカケが必要なの。まず1つ目のスイッチのキツカケ・・・これが難しいのよ』

どんなことだつてやろうつて思った

この世界から逃げ出せるのならなんだつてできるつて思った

『キツカケ』を聞くまでは。

『もう1つの世界の住人が私達の物語を読んで貴方のことを「かわいそう」と思うの』

かわいそう？

『狼に食べられる女の子を「かわいそう」と本当に心の底から思い、

「助けたい」と強く思うの。」

そんなの私にできることじゃない

待ってるしかないなんて

『もう1つのスイッチはね、他の世界に行つてすぐに始まるの』

何が？と私が聞くとおばさんはブロントのほつをちらりと見た。

『狼ももう1つの世界に行くのよ。それで、貴方と鬼ごっこするの』

鬼ごっこ？

鬼ごっこって、子供の遊びの？

『それで狼が鬼で、狼につかまったら貴方はまたこの世界に戻されちゃうのよ』

聞かなかったほうがよかったかもしれない

だけど私はそれから今まで この話だけを頼りにしてた。

この真っ白で何もない無の世界で

この話と想像するもう一つの世界だけが鮮やかに色づいてた

#### 第4話 現実の世界と男

だけどそんなの自分じゃどうしようもないことだし、童話を読むのは小さな子供ばかりなはず。

だから私のことを『かわいそう』と思ったとしても『助けたい』なんて本気で考える子なんていないだろう。

第一、私を見て『かわいそう』だなんて思うだろうか？

この頃の童話を読む歳の子供もませてるかもしれないし、『自業自得だ』なんて笑うかもしれない

そう考えると道のりは長そうだな、と思いため息が漏れる。

だけど

長い道のりを歩いてるうちに下を向くと、前を見るのを忘れてる。

いや、忘れてるじゃないし気づかないでもない。

とにかく道のりのゴールは突然目の前に現れるんだ。

ふと気がつけばいつものように私は木でできた小屋の前にいた。

そしてまた ドアノブの手をかける。

ドアノブを回そうとした瞬間、視界がゆがんだ。

気分が悪い

くらつとした瞬間、目の前の情景が違った。

目の前には茶色い木ではなくつるりとしたグレーの扉だった。

ガチャッ

ドアを開けるとそこには見知らない男がたっていた。

「誰だ」

男はギロリと私を睨むと立ち上がった。



そうしてようやく私は何が起きたのか理解した。

あの話は本当だったんだ!!!

スイッチが押されたんだ!!

ぼーっとしてる間に男は私の目の前にいて、ドアをおさえつけていた。

「うわ!ちよ、待った!!」

「待ても何もないだろ 不審者」

なんで私が不審者なの!!

私は慌ててドアを押さえた。

「待つてよ!話ぐらい聞いたっていいでしょ!」

どうにか説得しないといけない!

確かプロント(狼)が鬼ごっこするんでしょ!?

1人でいたら絶対につかまっちゃうよ

「話・・・ねえ」

男がまたギロリと私を睨みつけた。

私がカエルで男がへびみたいに私はカチンと固まっていた。

「まあ、別に話ぐらい聞いてもいいかな。それから追い出すのも簡単そうだし」

男は私がプロントにするように鼻で笑った。

それから私の腕をつかむと家の中へひっぱった。

「入り口につつまってるな。迷惑だろ」

後ろを見ると道幅が狭いせいで女性が私のせいで通れずにいた。

「こんなに道が狭いのも迷惑ね」

「馬鹿 アパートの道を広くしてどうすんだよ」

「あばあど？」

私が言うと、男はため息をついて私の腕を強くひっぱった。

「だから入れって言ってんだろ！」

「ご、ごめんなさい！」

慌てて謝り、私は男の家の中に入った。

さっきはかなり慌てていて気づかなかったけど、家の中はシンプルすぎた。

必要最低限の家具に白い壁。

なんだかそっけなくてこの人の趣味とかが見えない。

片付いてる辺りはまあ、綺麗好きなんじゃないかな？

1つだけあった。

勉強机の上に大きな何か機械のようなものがあった。

「ねえ、これは何？」

「パソコンだよ。知らないの？」

「うん。何につかうの？」

「他の奴はネットに使うけど俺は文章うつのに使ってる。」

「ねっと？」

「もういいだろ 座れよ」

男はイラついた様子で座布団をどこからか出すと床に落として指差した。

私が大人しく座ると男は座らずに壁によりかかってまた私を睨みつけた。

「話をするんだろ？とつとと話せよ」

私はちらりと男を見上げた後、話始めた。

男はじつと私を睨んで聞いていた。

私が話し終わると男は私を追い出さず、床にそのまま座り込んだ。

「だから俺にかくまってくれと？」

「は、はい・・・」

「ふうん・・・まあ、嘘言ってるようには見えないけど人間なんてわかんないからな。第一信じられる内容じゃないな」

「でっでも・・・」

私は思わずじわりと涙を浮かべた。

でも ここにいさせてもらえないと私はまたあの世界に戻ってしまう

そんなの嫌だ

せめてもつとこの世界を見たい

「ばっ ばか！泣くなよ！」

男は急に慌てたように立ち上がった。

「わかった！置いてやる！そのかわりに！」

「かわりに？」

私が聞いた瞬間、『ピンポン』とどこからか音がした。

男は舌打ちをすると私に隠れるよう合図して玄関へ向かった。

私は慌てて他の扉を開けて中に入った。

そこには見慣れない大きなトイレがあった。

しゃがむやつとは違うなあ？

そう思つて眺めていると大きな声な聞きなれた声が聞こえた。

「赤ずきん、ここにいんだろ？」

フロント  
狼だ！！！！

私は慌ててドアに耳を押し当てた。

## 第5話 狼の想い

「うるせえな・・・他人の家で騒ぐんじゃねえよ」

あの男の不機嫌そうな声が聞こえる。

ああ、どうなってるんだろう！？

出てっいたらばれちゃうし・・・覗くわけにもいかないし・・・

「じゃあ赤ずきん出せよ いんだろ？」

「何が赤ずきんだ そんなのいるわけねえだろ？」

「・・・嘘だね アンタ赤ずきんのおい、プンプンさせてるよ。  
俺は鼻が効くんだ」

そつだ 狼だから鼻が効くんだ！？

狼と鬼ごっこなんて不利じゃん！！

「・・・いたとしても赤ずきんが望まない限り俺は手助けしないね」

「いいから赤ずきん出せって！」

「うつせえな・・・いいじゃねえかアイツの自由にさせてやれば」

たぶん、男が舌打ちをした。

そつだそつだ！近所迷惑だ！早くどっか行っちゃえー！

心の中で叫ぶと、大きな鈍い音がした。

ガンッ！！！！

壁を殴ったような音。

たぶん、<sup>フロント</sup>狼だろう。

「アイツの自由になんて、させたくねえ！」

「はあ？」

「アイツの自由にさせたら俺はもうアイツに会えないんだよ！会ったら捕まえたってことになるから……」

ふと、2つ目のスイッチの『キツカケ』を思い出す。

そっか <sup>フロント</sup>狼に捕まえられたらいけないってことは <sup>フロント</sup>狼と会えないってことなんだ……

<sup>フロント</sup>狼は大事な家族みたいな感じだけど……でも、<sup>フロント</sup>狼よりもこっちの世界のほうが……

「俺はアイツが好きだから、会えないなんて嫌なんだよ」

ドクン と心臓が怪しい音をたてた。

目の前が真っ黒になった気がした。

黒いものが胸の中で渦巻いてる気がした。

「アイツはずっとこの世界を信じて待ってた。待ってたってどうしようもないしもしかしたら裏切られるかもしれないのに。」

「・・・そうだな」

「・・・そういうアイツを見ると、抱きしめたくてきりがないんだ」

男がドア越しに私を見た気がした。

心臓は相変わらずドクンドクン言っていて、胸の中は黒いものが渦巻いてる。

私は右手で自分の左手をぎゅっと強く握り締めた。

「赤ずきん!!!」

ビクツと体が震える。

「どうせ聞こえてんだろ!?俺は1回もお前に嘘ついたことねえ!だから絶対にお前のこと捕まえるからな!!!」



バンッ！！！！！！

狼<sup>フロント</sup>の大声の後、負けないぐらい大きなドアの閉まる音がした。

少しの間沈黙が続いた。

ガチャッ

寄りかかっていたドアが開かれて、私は外に飛び出す。

「うわ!？」

「・・・いつまでもトイレにいるなよ」

「・・・ごめんなさい」

私は小さな声で謝ると、また座布団に座った。

「告白までされて、でもこの世界にいたい？」

ストレートな質問に心臓がまた騒いだけど、私は小さく頷いた。

狼<sup>フロント</sup>にあんな風に思われてたなんて知らなかった

だけど 私は同じように思ったことない

妙に重い空気に耐え切れなくなり、私は背の低いタンスの上にある写真たてを見た。

そこには男と、その男に似た少し背の高い男がいた。

「・・・これは誰？」

背の高いほうの男を指差すと、男はため息をついた。

「俺の兄貴。」

それだけ言つと男は写真たてを素早く机の中に閉まった。

1秒でも見られたくないようだった。

「・・・貴方の名前は？」

「・・・ブルース」

「ブルース お願いだから私をここにおいてよ！つかまりたくないの！」

狼の気持ちを<sup>フロント</sup>知ってしまったら なおさらだった。

これから先どう<sup>フロント</sup>狼に接すればいいの？

あの白い無の世界は私と狼と<sup>フロント</sup>後ほんの数人で成り立ってた。

そのほんの数人なんてほとんど喋ることない。

あの世界で狼を避けるなんてできそうにない。  
フロント

「さっきもおいてやるって言っただろ」

ブルースはため息混じりに言う。

私があつと顔を明るくするとブルースは眉間にしわを寄せた。

「ただし！条件が2つある。」

「何！？なんでもする！」

「まず1つ このパソコンに触るな」

ブルースは机の上にあつた大きい機械を指差した。

触ったら壊れそうで怖くて触れないよ！

心の中で悪態をついたが、一応頷いた。

「それから、2人で住んでるって気づかれないようにしろ。お前は俺の許可がない限り外に出ちゃいけない」

「ええええ！！？」

「嫌ならいいけど？」

男は器用にまゆを上にあげて私を見下すような態度をとる。

「だって……せつかくこの世界に来れたんだから外を見たいよ」

「……じゃあそのうち連れてってやるから  
「本当！？だったらいいや！！」

私は思わずばんざいをする。

それを見た男はいきなりふきだしておなかを抱えて笑った。

ああ、よかった！！

これでこの世界にいれそう！！

この人も優しそうな人だし、本当によかった！！

## 第6話 ブルースのうまれた理由

「ねえ、1つ聞いていい？」

「ん？」

「さっきの写真のお兄さん、どうして隠したの？」

私が聞くと、ブルースは眉間にしわを寄せてわざとらしくため息をついた。

そりゃ言いたくないのかもしれないってことぐらい私にだってわかるけど、気になっちゃうよ！

「・・・似てなかっただろ」

「へ？ちよつと似てたと想うんだけど・・・」

私が言うと、ブルースは驚いたように口をぽかんと開けた。

「・・・似てるなんて初めて言われた気がする」

あれれ？

もしかして、顔が赤い？

気のせいかなブルースの顔は少し赤いみたいだった。

嬉しいとか？

「俺と兄貴は全然似てないんだ。外見はともかく内面が特に。」  
「好みが違うとか？」

「それだけならまだいいよ。全部が違うんだ」

ブルースはまた眉間にしわを寄せる。

それから少しだけ下を向いた。

「兄貴にできないことなんてなかったんだよ。絶対……」

ブルースは机の中からさつきとは違う写真を出して私に渡した。

そこには色鮮やかなシャツと半ズボンを着たブルースとお兄さんがいた。

「それ、知ってる？ テニスウェアっていうんだけど」

「てにすうえあ？」

「……テニスっていうスポーツがあんだ。それを兄弟でしてて……兄貴に勝ったことなんて1回もなかった」

ブルースは小さくため息をつくと床に座り込んだ。

私の目は見ないで、真下の床を見つめていた。

床と喋ってるわけじゃないのに。

「勉強も……女も 絶対兄貴には敵わなかった」  
「女？」

「俺が好きになる女、全部兄貴のこと好きなんだよ」

「うわ……」

思わず言うと、ブルースは苦笑した。

やっぱり私のほうは見なかったけど。

「・・・家にいるのがいつも辛かったんだよ。『完成した自分』がそこにいるから・・・」

完成した自分？

私にはよく意味がわからなかった。

だって自分は自分で、完成とかないんじゃないの？

人間って完成するものなの？

「・・・それに・・・中学卒業して、高校に入る時に知ったんだ」  
「何を？」

「俺は兄貴のためにうまれてきたんだよ」

「・・・お兄さんのために？」

「親が言ってたんだ。俺を産んだのは兄貴の練習相手にするからだって・・・テニスの・・・」

ブルースはそういうと頭を抱えた。

私には横顔も見えなかった。

ブルースがどんな表情してるのか全然わからない。

「だから高校入る時に1人暮らしさせてもらってたんだ。テニスもやめた。兄貴の為にテニスしてたなんて馬鹿馬鹿しい」

どうしてこの人はそんな風に考えるんだろう？

そんなことないはずなのに

「じゃあブルースは、お兄さんのためにテニスを始めたの？」  
「え？」

ようやくブルースが顔をあげて、私を見た。

ブルースの目は少し潤んでいた。

泣きそうだったのかもしれない。

「お兄さんのために生まれてきたの？お兄さんの練習相手になるために生まれてきたの？テニスを始めたの？」

「・・・・・・違う」

「そうだよ？ブルースは、お兄さんのために生まれてきたんじゃないよね？」

私が言うと、ブルースの目から涙が流れた。

「・・・そうだよ」

「じゃあどうしてテニスやめるの？家を出たの？お兄さんのこと嫌い？テニスのこと嫌い？家が嫌い？」

「・・・嫌いじゃない 全部・・・」

「・・・そうだよ」



私がそう言って頷いて、微笑むとブルースは目を強くこすった。

「けどあの時・・・兄貴のために俺を産んだった親が許せなくて・・・凄く憎くて・・・悔しかった」

「・・・うん」

ブルースは自分の足に顔をくっつけて、声を殺して泣いていた。

私が肩を撫でると私の手をたたいた。

思わず笑うと、ブルースは小さな声で言った。

「・・・そんなこと言われたの初めてだ・・・そんな風に考えたことも・・・なかった」

「・・・そっか」

「・・・ありがとう」

その時 会って初めてブルースの笑顔を見た。

その笑顔を見た時、自分の頭にある赤ずきんよりも自分の顔が真っ赤になったのは どうしてだろう？

## 第7話 外の世界

どうしたもんだろう

俺、ブルースは小さくため息をついた。

追いつつもりだった赤ずきんはあつという間に俺の心の中に住みついていった。

まあ、兄貴の話のおかげなんだけど・・・

仕方ない 置いてやるって言った以上、面倒見るしかないな

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「仕方ないな 今日外に出るか」

「本当!?!」

「お前の物が色々必要だろう?」

私はにつこりと笑って頷いた。

やったやった!!

外の世界が見れるんだ!!

あれ？そういえば私の物ってなんだろう？何が必要なんだろう？

あつちの世界じゃ服はいつも同じだったしお風呂もトイレもなかったんだよね。

まあ、おばあさんの小屋には色々あったから知ってたけど。

「あのさ、悪いけどこれ取ってくれよ」

ブルースはそういうと私のずきんを取り上げた。

「ええ！？それ、取らなきゃだめ！？」

「あのな、ずきんなんてかぶってる奴いないんだよ。しかもこれ結構汚いなー洗濯しといてやるよ」

私はイマイチ納得できなかったけど、一応ずきんを預けることにした。

あれがないとなんだか頭がむずむずするんだけどな・・・

「まあ、服はただのワンピースだしいつか・・・服も買えばいいし」

ブルースはぶつぶつ言うつと玄関に向かい、靴を履く。

「ホラ、行くぞ」

「う うん！」

私も慌ててブルースについていく。

外に出るとそこはやっぱり私にとって夢の世界だった。

「うわ．．．すごお．．．」

人がいっぱい！！

中途半端な数の木

木じゃない何かでできてるたくさんの建物

臭いにおい

「くさあ．．．」

私がつぶやくとブルースが苦笑する。

「タバコのおいかな？俺は吸わないんだけど。」

「ブルースって、何歳なの？」

鼻を押さえて鼻声で言う。

「ん？１９．．．２０だったっけ？忘れた。誕生日いつだかわかんねえし」

「へえ 人間でもそういう人いるんだあ．．．」

「そっいうお前は？」

「．．．．．忘れちゃった」

本当は忘れたわけじゃない

忘れたんじゃないくて 誕生日なんて存在しないはずなんだ。

気がついたらあの場所にいたんだもの。

だけど どうしてだろう

『嘘つかなきゃ』って 思っちゃったんだ

どうしてかなんて 自分でもわからないけど。

「そっぴやさー赤ずきんって狼のいる小屋に絶対に入るだろ？あれ  
って小屋に入らなきゃいいんじゃないねえの？」

ブルースが思い出したように言う。

私は思わず苦笑した。

「・・・無理だよ」

「え？」

「小屋が目の前に現れれば私は絶対に小屋のドアを開けるしかない

の。どんなに嫌でも体が勝手に動いて開けてしまうの。」  
「・・・・・・・・ふうん」

私だって 逃げられるものなら逃げる

だけどたとえドアを開けなくてもあの世界から逃げることはできなかった。

逃げたって 逃げ出した場所はどうせあの世界の中なんだから。

## 第8話 ブルースとテニスと職業

「そんなことより！ブルースはテニス、しないの？」

なんだか暗い気持ちになってきたので話題を変えようとその話をすると、ブルースの眉間にしわがよった。

「なんでその話になんだよ・・・」

「だってさ、テニス好きなんでしょ？どんなのか知らないけどテニスしてるブルース、見たい！」

ブルースは急に顔を赤くした。

それから急に早歩きになって私の前を歩き出す。

「もうやめたんだからいいんだよ！」

「ええー！？じゃあ今は何してるの！？」

「何・・・って・・・」

途端にブルースは足を止めた。

ブルースに追いつこうと軽く走っていた私は顔をブルースの背中にぶつけてしまった。

「あ、悪い・・・」

「へ、平気！」

「・・・別に今は何もしてねえよ」

「嘘だ！こんな凄い世界にいるのに何もしてないわけじゃないじゃん！」

私が言っているとブルースは不愉快そうに笑った。

私も負けじとむっとした表情をする。

「別に・・・普通に生活してるだけだろ？適当に仕事して給料もらって飯食って寝てんだよ」

「仕事？何してるの？」

「なんだっていいだろ！」

「よくないよ！一緒に住むのにさ！」

私が言うと、ブルースは大きくため息をついた。

それから周りに聞こえないような小さな声でつぶやく。

私が「は！？」と大きな声で聞き返すと短く唸ってもう1度ぼそりとつぶやいた。

「……ファンタジーの……小説家」

「ええええええええええ！！？」

「似合わねえだろ！？だから言いたくないんだよ！」

「似合う似合わないはわかんないけど、だったらどうして私の話、最初信じてくれなかったの!？」

私が言うところのブルーはまた眉間にしわを寄せる。

そのうちいつも眉間にしわがあるようなおじいさんになるんじゃないだろうか。

「あのな、それを仕事にしてるからすぐに信じるって話じゃねえの。実際は半信半疑だよ。非科学的なことだし・・・自分の目で実際に



見た世界じゃねえからな」

「・・・ふうん」

ブルースは急にきよろきよると辺りを見回す。

「何？」

「いや・・・なんでもない」

私が首をかしげるとブルースは私の腕をつかんでまた早歩きになった。

早くここから逃げ出したいみたいだった。

やっぱりいいなあ　簡単に逃げ出せて。

## 第9話 ブルースの母親

ブルースについて行くと凄く大きくて人のたくさんいる建物の中に入った。

「うわー！ひろーい！」

「デパートなんて赤ずきんの世界にはないよな」

ブルースはそう言うときよろきよると辺りを見回す。

するとすれ違う人達の中で1人の女性がブルースの肩をたたいた。

「こんなところで会うなんて凄い偶然じゃない？」

女性がにこりと微笑んで言う。

するとブルースは女性の肩を振り払い、後ずさりする。

「あら、ひどい」

「誰？」

私が言うとブルースは私を睨みつける。

それと同時に女性が嬉しそうに笑った。

「えーと、この方は誰？」。

女性はニヤリと笑うと、ブルースの方を見た。

ブルースも女性をちらりと見ると、大きくため息をついて言った。

「俺の、母親」

「え!？」

じゃあ、さっき言ってた親!？

じいつとよく見るとそういえば雰囲気似てるかもしれない。

「まったく、1人暮らしして何してるのかと思えば・・・」

「か、彼女じゃねえ!」

「あらあ こんなところに2人きりで来てつきあってないだなんて  
凄い嘘をつくのね?」

お母さんかあ・・・

若いなあ ブルースって何歳だっけ?

20歳として〜20歳で産んだとして・・・40歳!?

若い・・・見えないなあ

「コイツは今日、うちに来た赤ずきんで・・・」

「赤ずきん?」

母親が聞き返すと、ブルースが『しまった』って感じの顔をする。

それからすまなさそうに私の顔をチラリと見た。

別に赤ずきんってことバレちゃいけないわけじゃないからいいのに。

「もしかして、童話の赤ずきん？」  
「はい。」

私が素直に答えると母親の顔がぱあっと明るくなる。

それからブルースを無視して私の両肩を強くつかんだ。

「まあ！凄いわぁ！！すごい偶然だわぁ！」

「え？」

「私はね、人魚姫だったのよ」

ブルースは母親の発言を聞いてぽかんと口を開けていた。

にんぎょひめ？

「私はね、童話の人魚姫の人魚姫を演じてたのよ、そしたらね、今の旦那・・・つまりブルースのお父さんが助けてくれたの」

「えー！赤ずきん以外にもあったんですかー！」

「私も今知ったわー！！」

凄い凄い！！

私が感動しているのに大して、ブルースは『信じられない』という感じだった。

「嘘だろ・・・母さんがそういうことって・・・」

「あらあゝ赤ずきんちゃん、頑張ってるね！貴方がブルースと結婚したら面白い家族関係だわー！」

「な、結婚つて・・・!」

顔を赤くして言うブルースに、母親はにこやかに言う。

「あの世界から呼び出したからにはきいっちり責任とりなさいよ？ブルース。あの世界はね 本当にこわいんだから」

母親はブルースにそういうとブルースの肩をぽんと優しくたたいた。

## 第10話 クロウさん

「責任も何も・・・」

ブルースが言いかけたところで母親はにこやかに手をふって人ごみに紛れた。

「つたく・・・」

「明るいお母さんだったね」

「は？あんなの・・・」

凄く明るかった

あの世界にいた人だなんて思えない

あの世界のこわさを忘れてしまったんだ

あの世界は何もしてこない

ただと凄くこわかった

いつもこわかった

私達を縛ってたから

見えない鎖を体中に巻きつけてたから

「・・・赤ずきん？」

気がつけば私の体は小刻みに震えていた。

戻りたくない

あの世界に戻りたくない

「ブルース・・・お願いだから・・・私のこと追い出したりしないでね・・・」

「え？」

「嫌なの・・・もう戻りたくないの・・・」

お願いだから

もう戻りたくないから

「・・・追い出すつもりなんてねえよ。俺がお前のこと呼んだよう  
なもんだし・・・」

「・・・うん」

「お前・・・大丈夫か？」

「・・・・・・うん」

ブルースがいるなら大丈夫だよ

ブルースから離れたくない

絶対に離れたくない

「え・・・えーと、最初は薬局だな！うん！あれだ！シャンプーと  
リンスとボディソープ買わなきゃ！」

ブルースは慌てたように言うと私の腕をひっぱった。

大人しくついていくといろんな箱や筒や袋のあるお店に着いた。



「女物のシャンプーとかわかんねえから選べよ。」

「・・・しゃんぷーって 何？」

「・・・は？」

私が聞くと、ブルースは口をぽかんと開けた。

「もしかしてお前、風呂とかはいらない？」

「うん。」

「うっわー・・・嘘だろ・・・でも臭くないしなー」

ブルースはそういうと綺麗に並べられた色とりどりの物の中から3つ選ぶと私の腕をつかんでまた歩き出す。

「いいや 適当に買っとこ！」

「え・・・でも今までしなくて平気だったんだからいいのに。」

「いいんだよ！まあ、お前の場合お買い物システムも知らないんだろっな」

「おかいものしすてむ？」

私が言うとブルースは苦笑する。

「発音違っし・・・買い物する時は、金払わなきゃいけないってこと。ま、買い物時は俺が行くから知らなくていつか」

ブルースはそういうと大きな灰色の机の前に立っている男の人にさっきの物を渡した。

ふと、男の人がブルースをじっと見つめる。

私のほうを見ていたブルースがそれに気づき、男を睨みつける。

「何ですか？」

「・・・お前、もしかしてブルース？」

「あ？」

男はブルースの両肩をつかむと大声で言う。

「ブルースじゃん！俺だよ！クロウ！中学で仲良かったじゃん！」

「あー、クロウか！でかくて気づかなかった」

友達かな？

なんとなく疎外感を感じて、私は2人から少し離れた。

「何あれ、彼女？って・・・もしかして結婚とかしてる？」

クロウとかいう男の人はブルースが渡した物を見て眉間にしわを寄せる。

「違う！！ちょっとわけがあって一緒に住むことになって・・・」

「えー！あんな可愛い子と！？」

「ま、まあ・・・」

「いいなあ〜いいなあ〜」

「アホ どうせお前も女癖なおってねえんだろ？」

なんか、仲よさそうだなあ・・・

何のこと話してるのかよくわからないのが残念。

ぼんやりと2人を眺めているとクロウさんが私のほうを見てにこっ

と微笑む。

私が頭を下げるとブルースのほうを見てニヤニヤ笑いだす。

「彼女じゃないなら俺に紹介してよ」

「ばあか お前、今彼女何人いんだよ」

「んー？こないだ相当きつたから3人ぐらいじゃねえかな」

「・・・相変わらずだな」

「モテる男は苦労するのです」

クロウさんはにこやかに言う。とブルースの渡した物を袋に入れてまた渡す。

「久しぶりに会った親友だからな。お金はいらないよ！俺が払つく」

「え、いいのか？助かるけど・・・」

「うん。で、あの子名前は？」

「ばあか！」

ブルースは少し大きな声で言う。と私のほうへ戻ってくる。

そしてさっき渡されていた袋を私に持たせた。

「コイツには手、出させねえよ！」

ブルースはクロウさんにそっくり捨てる。と私の腕をまたつかんでぐいぐいひっぱった。

「ねえ、さっきの人って・・・」

「クロウつつて俺の中学の時の友達！すっごい女好きだから近寄

るな！あ、近寄せねえけどな！」

「女好き？」

「そ。女でそこそこ可愛ければ誰とでもつきあえんの。危ないの。」

ブルースは小さい子に言い聞かせるように言う。

そこそこ可愛ければ？

誰とでも？

つきあえる？

危ない？

私の頭は『おかいものしすてむ』と『クロウさん』で混乱していた。

## 第11話 俺の世界

世界は全部『俺以外の誰か』が進めていた。

俺のしていることはすべてその『誰か』が作り出したもので『誰か』が指示したものだっただけ。

自分が誰かに指示をすることはなかったし・・・

いや、最近は誰かとかかわることが少なかったかな。

高校を卒業してからは友達ともほとんど会っていなかったし。

最近喋った人つつつたらコンビニの定員と親と出版社の人ぐらいだった。

そんな俺の世界に赤ずきんが入ってきた。

赤ずきんはあつという間に俺のそばに住処を作った。

クロウと赤ずきんを関わらせたくないなんていう、兄が妹を思うような感情まで生まれてきてるぐらいだし・・・

そんなことを考えて俺は短くため息を漏らした。

そんな俺を赤ずきんは不思議そうに眺めている。

「そついや赤ずきんさ・・・赤ずきんって呼ぶのなんか変だから名前決めるよ」

突然の俺の提案に赤ずきんはしばらく目をぱちぱちさせていた。

「ええと・・・」

全然思いつかないらしく、赤ずきんは目を泳がせて何度も『ええと』と繰り返している。

「・・・マゼンダとかは？」

「マゼンダ？」

「あ、ホラ 色とかでマゼンダだかマゼンタだかあるじゃん。なんか赤っぽい色じゃなかったっけ？」

「あ、赤ずきんだから赤？」

「そうそう。」

俺が頷くと赤ずきんは嬉しそうに笑った。

その様子がなんだか小さな子供を見ているみたいでなんとなく『可愛い』と言いそうになり、慌ててその言葉を飲み込んだ。

「んじゃマゼンダ、行こう」

「うん！」

マゼンダはまた嬉しそうに笑って俺の後についてくる。

「次はなんだ？服かな？」

「服？これじゃだめ？」

マゼンダはそう言って今着ているワンピースを手でひっぱった。

「それだけだろ？一着くらい買おう。」

そう言って俺は辺りを見回した。

まずい

自分で言ったからとはいえ、女物の服なんてどこに売ってるかわからない。

まして、女は好みの服がうるさいとかクロウが言ってた気がするし、歳にあった服がどうか言ってた気がする・・・

ああ、それより安い店と高い店とあるんじゃないのか！？

そんなことをごちゃごちゃ考えていると誰かが俺の後頭部を強くたたいた。

驚いてそっちを睨みつけるとそこにはニヤニヤ笑いのクロウがたっていた。

「さっきの人・・・」

「どうも！何挙動不審になってんだよ　もっと堂々と歩けよ。女の子と2人なんだからさー」

「な・・・ッ　お前薬局は！？」

「もうあがりだよ。終わったんだ。ホラ、私服だろ？」

確かにクロウは薬局のださい緑のエプロンじゃなくただのＴシャツとズボンだった。

チラリとマゼンダのほうを見るとマゼンダは口を半開きでじっとクロウを見ていた。

まさか見とれてるんじゃないよなあ・・・

そんなことを考えて俺はまたため息をついた。

俺はシスコンな兄貴か！！



## 第12話 クロウと買い物

「んで、どこ行くところだったんだ？大丈夫、邪魔はしねえよ」

俺はチラリとクロウを睨んだ後、耳元で小さな声で言った。

「コイツの服・・・女物なんてよくわかんないんだよ」

それを聞いたクロウが苦笑して俺を見た。

それからマゼンダのほうをじろじろ眺め始めた。

しばらくして満足気にニヤリと笑った。

「よしよし、クロウ様に任せなさい」

クロウは俺達に言うと1人でさっさと歩き始める。

俺が黙って後に続くとマゼンダも慌ててついてくる。

少ししてクロウに追いつき、横に並ぶとクロウは俺の耳元で囁く。

「お礼はあの子のメールアドレスでいいよ？」

「アホ 携帯持ってたえよ」  
「へえ そうなんだ」じゃあお前のメールアドレスでいいよ」

クロウはそういうと自分の携帯を取り出し、俺のズボンの尻ポケットに手をつっこんで俺の携帯を引き抜いた。

それから勝手に俺の携帯と自分の携帯を交互にいじった。

しばらくすると俺の携帯を返した。

「お前・・・人の携帯勝手に・・・」

「いいじゃん。悪いことしてないし。」

「まあいいけどさ・・・」

クロウは女性関係以外のことは信用できる奴だった。

金の貸し借りも嫌いなほうだったし、約束もちゃんと守る奴だった覚えがある。

そういう奴は俺の身の回りには少なかった。

「お前、昔の連中とまだ連絡とってんの？」

「あー・・・ごく一部だけだな」

「・・・だらうな」

何気なく口にした質問を俺はかなり後悔した。

昔の友達なんかの話はクロウにとってNGだった。

クロウは女性関係でごちゃごちゃしたり、結構気も強くケンカも強かった。

そのせいか1人でいることが多く、友達が少なかった。

まして1度別れようと決めた女はこっぴどくふったので女からはかなり恨まれていたし。

その女の元彼氏なんかはクロウを恨むことが少なくなかった。

そのせいか特に女をとられたわけでもない男にも避けられていた。

そうそう、ケンカも強かったから他校の連中がケンカしに来たこともあったな。

そういう意味では結構有名な奴だった。

そんなクロウが昔の奴等と仲良くしてるわけないか。

「あ、でもルフアとミドリって覚えてるか？」

俺はその名前に覚えがあり、昔の記憶をよく思い出した。

こういう時最初に出てくるのは教室の風景だった。

その中に外見だけはひ弱そうな美少女の男と、男勝りな感じの姉御な女が浮かんた。

「ああ、いたな」

「アイツ等とは連絡取ってる。お前も仲良かったよな？」

「ああ、そうだな。」

「そうそう。アイツ等結婚したんだぜ」

「け・・・ッ!？」

俺には当分縁のなさそうな言葉。

ルファとミドリが!?

あのだっちが男でどっちが女だかわかんないような2人が!?

第一、いつからそういう仲に!?

「なんか昔からルファがミドリのこと好きだったみたいだぞ」

「へ、へえ・・・」

数年間関わっていないだけだったのに、ずいぶん変わったもんだっ  
た。

やっぱり世界は『俺以外の誰か』が進めているものに違いなかった。

### 第13話 クロウと買い物2

ふと後ろを歩いているはずのマゼンダのほうを見ると目が合った。

そういえばさつきからマゼンダにはついていけない会話だった。

俺はマゼンダの腕をつかんでひっぱった。

「！」

驚いた表情のマゼンダを見て思わず笑うとマゼンダは嬉しそうに笑った。

こうというのが妹を見るシスコン兄みたいなんだろうか・・・

いや、マゼンダは妹じゃないし俺はシスコンとかじゃないし・・・

ごちゃごちゃ考えているとクロウに頭をたたかれる。

「今、どっか飛んでたぞ？」

「や・・・大丈夫だ」

「ここなんてどうよ？」

クロウが足を止めて指差した店は俺には当然、まったく縁のない世界だった。

フリルだとかスカートだとか・・・

彼女が多いとはいえよくもまあこういう店を覚えてるもんだ・・・

「・・・可愛い」

マゼンダは小さくつぶやく。

その瞳はきらきら輝いていて、凄く可愛かった。

「気に入った？ならよかったー」

俺はそつと、そばにある服の値札を見る。

Tシャツが1550円・・・

別にいいか・・・こんなもんだよな・・・

「これ可愛い・・・」

マゼンダが触れたのはチェックのワンピースだった。

明るい茶色のギンガムチェック。

ああ、なんか似合いそうな・・・

「あー、それ少し丈短いからさ・・・これとか下にはいたら可愛いよ」

クロウはまるで店の定員のようだった。

どこからか黒くて足元がレースになっているスパッツを持ってきてマゼンダに渡す。

「・・・可愛い」

マゼンダはそういった後、ちらりと俺のほうを見た。

「いいよ。買ってやるよ」

俺が言うとマゼンダはぱあっと明るく嬉しそうな顔をした。

まったく そんな顔するんならなんだって買ってやるよ・・・

ぼんやりとそんなことを考えた後首をふる。

いやいや！！本当にシスコンな兄貴になってどうする俺は！！

「これとか似合いそうだねー」

服を選んだりはクロウに任せることにして、俺は2人を眺めていた。

なんとなくお似合いなんだよな この2人。

そういえば俺というよりクロウというほうが楽なんじゃないかな女物の服とかわかるんだし。

そんなことを考えているとマゼンダが俺の腕をつかむ。

「ん？」

「これ、似合う？」

マゼンダは白くてふわふわしたブラウスを俺に見せる。

「あゝ・・・」

そんなのわかんないって！

返事に迷うとクロウが苦笑する。

「あれだよ デニムのスカートかズボン買ってやれよ。それならブリッコっぽくないし」

「でにむ？」

「ああいうのだよ。」

クロウはデニムのスカートを指差す。

ああ、やっぱりクロウのがわかるんだなあ

かといって、いまさらどうしたってあんな風にはなれないし・・・

結局俺はマゼンダの服を数着買ってやった。

よかった・・・財布の中多めに入れておいて。

まあ、当分こんな買い物しないよな

「・・・疲れた」

俺の手首をつかんだマゼンダが小さく言う。

「慣れないところだもんな。向こうのベンチで休んでろよ」



そう言つてベンチを指差すとマゼンダは小さく頷いてふらふらとベンチへ向かう。

「じゃあブルース、ちよつと遊ぼう!」

「いや、面倒なことはしないぞ・・・」

ちらりとマゼンダのほうを見るとじつとこちらを見つめていた。

「じゃあマゼンダ、俺達ちよつと向こうに行くけどすぐに戻ってくるから。何かあったらすぐに人の多いところへ行けよ」

そついうとマゼンダはまた小さく頷く。

それを確認すると俺とクロウは本屋のほうへ向かった。

クロウは一般書の中にある俺の書いた本を見つけるとぱらぱらとページをめくりだす。

「・・・よく本人の前で読めるな」

「本人の前だから、だろ。よくこんなの書けるよな」

クロウがそついった時、誰かが俺の首をつかんだ。

驚いた俺をクロウが驚いた表情で見ている。

「どーも」

耳元で聞き覚えのある声がした。

マゼンダと同じようなにおいの男。

狼しかない。

「・・・こんなところまでついてくるのか？」

「俺はどこへだって来るよ」

「誰？」

「・・・ごめんクロウ、ちょっと聞かれたくない話させられるらしい」

俺が言っているとクロウはちらりと狼のほうを見た。

それから小さく頷くとどこかへ行ってしまった。

「・・・手を離せ。」

俺が言っていると狼は素直に俺の首から手を離した。

小さく咳き込んでそちらを見る。

「なんなんだ・・・俺に用でもあるのか？」

「1つ、聞きたいことがあるんだ」

「ん？」

狼はじつと俺の目を見る。

俺も逸らさずに見てやる。

「アンタは赤ずきんが好きなのか？」

「・・・好きって、恋愛感情？」

「決まってるだろ！」

「いや、恋愛感情は・・・ない・・・と思う」

そうか そんなこと考えてなかった

兄が妹を思うような感情と違っていただけ、まさか・・・

「・・・思いつてのが怪しいけど、まあいいや。だったら質問変えるよ。あんたは赤ずきんを一生大事にできるか？」

「は？」

「アイツはあの世界に帰りたくないだったらあんたのそばにいるしかない。あんたはそれでいいのか？」

好きでもない女とずっと一緒にいれるか？」

## 第14話 恋愛音痴とマゼンダ

返事ができず、ただ狼を睨みつける。

「・・・まあいいよ」

狼は呆れたように言った。

それから俺を睨みつける。

「言つとくけど、中途半端なこととして泣かすのは勘弁してくれよ！」

狼はそういつと走って店を出て行った。

まさかマゼンダのところへ行くのかと思って俺も走ろうとすると急に狼が足を止めて振り返った。

「しばらくは様子だけ見てるよ！手出しはしない！」

ほっとして俺も足を止めるとすぐに狼は走り出した。

狼の後姿をただ眺めているとクロウが俺の肩をつかむ。

「何だあれ？赤ずきんとか一生とか・・・なんなの？」

「や・・・そのうち説明する・・・」

「今じゃなきや駄目」

「はあ！？だつて・・・」

「今!!!!」

俺は仕方なく説明した。

マゼンダに聞かされただけの話だし、あまり信じてなかったせいかなあやふやだった。

どこから話せばいいのかもよくわからなかった。

何度かつかえたものの、一応最後まで説明することができた。

「でもさ、もう信じるしかないよね」

「まあ・・・な」

母さんの話を聞いた時点で信じてはいたけど・・・

でもやっぱりそんなことがあるんだろうか？

「で、ブルースはどうするの？一生あの子といれる？」

「そんなことわかんねーよ！」

思わず吠えるように怒鳴るとクロウは苦笑した。

「相変わらず恋愛音痴だね。」

「相変わらずじゃねえ！」

「だってさ、女の子に告白されたり告白したりしても絶対に上手くいかなかったじゃん」

ああ、コイツに言われると凄く腹が立つ・・・

「それはお前がちよっかい出てきたり兄貴がちよっかい出したりしたからだ!!」

「あ、そうだね。どの子もほとんど俺とお兄さんがもらってたかも」  
俺はイライラに耐え切れず、楽しそうに笑うクロウに背を向けて歩き出した。

早歩きの俺をクロウが慌てたように追いかけてくるのがわかった。

悪かったな！恋愛音痴で！

恋愛なんて音痴でも困らないさ！

俺は仕事一筋ってことにしとけばいいんだ！

ふと、マゼンダの顔が浮かんた。

それからすぐに頭を横に何度も振った。

違う違う違う！！

マゼンダはそういうのじゃない！！

第一、マゼンダを好きになってつきあうとするぞ！？結婚とかはどうなる！子供は！？老後は！？墓は！？

この世界の人間じゃないマゼンダに籍とかはあるのか！？

ないに決まってる！

「って・・・あれ？」

俺は独り言のようにつぶやいて足を止めた。

クロウもすぐ後ろで足を止める。

じゃあどうして母さんは父さんと結婚できたんだ？

俺は大きいため息をついた。

馬鹿か？俺は。

そうなるかわからないのにどうしてこんなにイラつくんだ？

俺はマゼンダのことなんて、好きじゃないはずだろう？

## 第15話 携帯とシスコン？

マゼンダの待っているベンチまで戻ると、マゼンダはすやすやと眠っていた。

「うつわ・・・」

俺は思わず大きなため息をついてしまった。

普通寝るか！？外で！！

俺は起こす気にもなれず、隣に座った。

その時どこからか携帯の着メロが聞こえてきた。

クロウが慌てたように携帯を取り出す。

それから小さく舌打ちをして携帯をしまった。

「悪い、用事できたから帰る。」

「ああ、コイツの服とかありがとな。」

「うん。また連絡するから」

クロウはにこやかに手を振ると帰っていった。

横を見るとさっきのクロウの携帯の音で起きたのか、マゼンダが眠そうに目をこすっていた。



「ああ、起きた？」

「んー・・・寝てた？」

俺が苦笑するとマゼンダはキョロキョロと辺りを見回す。

「クロウなら帰ったよ？」

「ふーん・・・」

マゼンダは興味なさそうに言うとかくびをした。

俺は携帯を開いてクロウからのメールを確認する。

電話番号とメールアドレスだけをうったメールだった。

番号はともかくアドレスはうたなくてもわかるのに。

「後・・・なんかいる物ないよな？欲しい物ある？」

俺が聞くとマゼンダはまだ眠そうな顔で首を傾げる。

「・・・あ」

「うん？」

俺は手の中にある携帯をマゼンダに見せた。

「これ、離れた人と電話したり手紙みたいなののやり取りする機械  
なんだけど・・・いる？」

「必要なの？」

俺の説明を聞いているのか聞いてないのか、マゼンダは眉間にしわを寄せた。

まあ聞いてても意味わからないだろうけどな。メールとか。

「あー・・・俺は持ってたほしいかも」

狼の顔が浮かんだ。

もしも俺が離れてる時に会ったりしたら・・・

そういえばアイツ、様子見るとかなんとか言ってたな・・・どうかで見てたりして？

「じゃあいる」

俺とマゼンダは携帯ショップに行った。

そこに入ってから1時間とか2時間とか かったが、なんとか携帯を買うことができた。

「悪い。お前の名前の身分証明とか面倒っぱかったから俺の名前とか使った。」

「うっん 平気。どうやってつかうの？」

「あー・・・」

マゼンダの気に入った白い携帯に触れると、同時にマゼンダの指に触れた。

その時、狼の言葉を思い出した。

『好きでもない女と・・・・・・・・』

そんなこと言っただけじゃないだろ

マゼンダの説明だと俺がマゼンダを呼んだみたいなもんだし、今のところは一緒にいないといけないだろ。

それに一生一緒とは限らないだろ？

バイトするとか学校に行くとか・・・

詳しいことを母さんに聞こう。

そうだ どちらかの男と結婚して専業主婦でもいいじゃないか

ふと、他の男というマゼンダが浮かんで一瞬イラついた。

今はそんなこと考えなくていいんだよ！！

今のところは俺もコイツと離れたくない・・・・・・・・し？ん？

「・・・・・・・・あれ？」

なんだ、それ？

やっぱ俺ってシスコンの兄貴？

## 第16話 カメラ機能

携帯の使い方の説明をしてもマゼンダはいまいち理解してそうになかった。

まあ、使ってるうちに慣れるだろう いや、慣れる！！

俺は心の中で叫んだ。

まあ、もう必要なものはないだろうな。

そう思い、『帰ろう』とマゼンダに言おうとしてマゼンダの方を向いた瞬間。

パシャッ！

携帯のカメラの不自然な機械音が聞こえた。

驚いてマゼンダのほうを見るとマゼンダの手には携帯があった。

その携帯は『カメラモード』になっていて、俺のほうに向けられていた。

「な・・・っ」

眉間にしわを寄せる俺とは対照的に、マゼンダは嬉しそうに笑った。

「えへへ」

「えへへじゃねえ！何撮ってたんだ！消せよ！」

小さい頃から写真を撮られるのが大嫌いだった。

「いいでしょ？別に。」

マゼンダは偉そうに言つと携帯を閉じた。

俺はため息をつくと携帯を開いた。

初めて持つ携帯を興味津々に眺めているマゼンダに携帯を向ける。

パシャッ！

さっきのマゼンダの携帯と同じような音が響く。

マゼンダが大きく目を見開く。

「ちょ、自分も撮ってるじゃん！」

「お返しだよ」

俺が満足気に笑つて言つと、マゼンダは頬をふくらませた。

「いいもん。さっきの絶対に消してあげない！永久保存！」

「じゃあ俺も絶対消さない。永久保存してやるよ」

マゼンダはチラリと俺のほうを睨んだ。

俺がへらつと笑つとマゼンダも笑った。

ああ、今はこれでいいや

一生とか 先のことなんて 今はいい。

あんまり考えたくない

マゼンダの将来とか

マゼンダのいない俺の未来とか。

## 第17話 感情と勘

「いや、ブルース。」

「ん？」

マゼンダの携帯を買った後、俺とマゼンダは俺の家に戻った。

慣れないこの後で疲れたマゼンダはすやすやと眠っていた。

そんなマゼンダを起こさないよう、俺はアパートの廊下でクロウと電話をしていた。

「そういうのを世間では『恋愛感情』というんだけども」

「はあ？ そんなんじゃないだろ！」

「だって、ようするに離れたくないんだろ？一緒にいたいんだろ？  
そんなの好きだからじゃん」

「違う！絶対違う！」

大声を出したことに気づき、口元を押さえる。

近所迷惑、近所迷惑。

「じゃあ俺がもらっつよ？あ、あの時の狼とかも同じこと言うだろっ  
ね？」

「な・・・っ」

「困るんだろ」

図星をつかれた。



ぐしゃぐしゃと頭をかき乱す。

「・・・困るけど！好きとかじゃない・・・」

「はー？なんで？」

「だってこんなん、今までと違うじゃん」

今までの俺の恋愛事情から考えて、これはきっと恋愛感情じゃない。

「今まで、1度好きになっても一緒にいたいとか他の奴にとられたくないとか思わなかったし。」

「えー！？」

「別に他の奴と喋ってたりしてもなんとも思わなかったよ」

俺がきつぱり言っても、クロウは納得できなさそうに唸った。

「じゃあなんでソイツのこと好きだっと思ったんだ？」

「いや、好きとか違うとかって勘なんじゃないの？」

「はあ！？」

クロウがマヌケな声をあげるから、俺は思わず笑ってしまった。

「お前さーそれ、みんな好きじゃなかったんじゃないの？」

「なんだそれ？」

「みんな勘違いだったってこと！ホラ、男でも『コイツと仲良くなりたい』とか思う奴いるだろ？」

そついうのと同じ感情だったんじゃないの？」

俺はしばらく唸った。

そんなこと1度も考えたことなかった。

それに、女とつきあったことなんてほとんどない俺に比べてクロウは・・・・・・・・。。

そんなこと考えると自分が変な奴に思えてくることがあるけど、事実だ。

俺とクロウじゃ恋愛経験値がケタ違いだ。

「そう・・・なのかな」

「まあ、少なくとも俺はそうだと思うよ。」

そうなのか？

俺は マゼンダのことが好きなのか？

## 第18話 トイレへ逃げる

部屋に戻ると、マゼンダは目を覚ましていた。

俺が戻ってきたことに気づくと走って俺のところまで来た。

俺が驚いているにも関わらず、マゼンダは俺の腕を思い切りつかんできた。

「え!？」

「よ、よかったあー!起きたらないから逃げられちゃったのかと思った!！」

「逃げるう!？なんでだよ!」

「や、やっぱり迷惑だったのかなとか思っで・・・」

マゼンダの目は潤んでいて、半泣き状態だった。

俺は小さくため息をつくともゼンダの頭を優しく撫でた。

「大丈夫だよ 逃げたりしないから」

「・・・うん」

マゼンダは顔を上げて俺を見ると、にっこりと微笑んだ。

俺は慌ててマゼンダから離れた。

「ごめん!俺、今凄くトイレ行きたい!！」

きょんとしているマゼンダを置いて、俺はトイレへ駆け込んだ。

どんだけトイレ行きたいんだよ俺！！

なんかクロウにあんなこと言われると急に気になるんだけど？

『そついうのを世間では「恋愛感情」というんだけども』

ちょっと待ってくれー！！

数分後、俺は何食わぬ顔でトイレから出た。

時計を見るともう6時で、そろそろ夕飯を食べなくちゃいけなかった。

「マゼンダ、嫌いな食べ物って何？」

「嫌いな食べ物？」

「うん。そろそろ夕飯作らなきゃいけないから」

俺が言うと、マゼンダはまたきょとした。

俺が何言ってるのかわからないらしい。

「もしかして、何か食べたりってことしなかった？」

「うん・・・」

俺は小さくため息をついた。

お風呂には入らない トイレにも行かない 飯も食べない  
ずいぶん便利なもんだ・・・

「じゃあいつか。俺もあんま腹減らないし」

たまに1日何も食べない日がある。

どうしてだろう 忘れてるんだ

体が『生きよう』って思っただけなのかもしれない

「じゃ、シャワーの使い方とか教えてやるから来いよ」

俺が言うと、マゼンダはすぐに立ち上がって俺のところまで走ってきた。

風呂を開けるとマゼンダは首をかしげていた。

「ここひねったら水が出るから。で、これがシャンプーで・・・」

一通り説明をしても、マゼンダは首をかしげたままだった。

「わかった？ できる？」

一応聞くと、マゼンダは首を激しく横にふった。

「だから・・・」

とりあえず、実際に水を出してみたり、シャンプーとかを泡立てたりして見せるとマゼンダはようやく理解できたらしい。

目をきらきらと輝かせていた。

「わかったあ！ありがと！！」

「そりゃよかった・・・じゃ、風呂入れよ。俺は後でいいから」  
「うん！」

マゼンダはにこにこしてた。

まあ、気にしないようにしよう。

不自然な態度とってまた『逃げられるかと思った』とか言われるかもしれないし。

## 第19話 夜

マゼンダの長い入浴時間が終わり、その後で俺が入った。

思ってたより風呂場は綺麗なままで、俺は思わず笑ってしまった。

俺が風呂を出る頃にはもう9時をまわっていた。

「今日は疲れただろうし、もう寝ていいぞ？俺は仕事しとくから」  
そう言っつてパソコンの前に座るとマゼンダは小さく頷いて布団の中にもぐった。

が、すぐに上半身を起こして俺のほうを向く。

「ブルース、布団は？」

「・・・あゝ、まあ、どうにかする」

この家には当然ながら布団が1組しかない。

だつて俺1人暮らしだし。

「じゃあ私、いいよ！風邪なんてひかないだろうし！」

「はあ！？いいって！！なんでマゼンダが床に寝て俺が布団なんだよ！おかしいだろ！」

「え、でも・・・」

「いいから！！寝てろよ！！！」

思わずイラッとして怒鳴ると、マゼンダは眉間にしわを寄せた。

それは怒ったりしてる表情じゃなく、悲しんでるような表情で俺の胸を痛めた。

「・・・寝る」

マゼンダはそういうと俺に背を向けて布団にもぐった。

俺はため息をついてパソコンに向かった。

カチャカチャ・・・カチツ！！

以前からやっていたファンタジー小説。

ようやくラストが決まり、俺はメールで担当の編集者に原稿を送りつけた。

パソコンの電源を切り、ふと布団のほうを見るとマゼンダが幸せそうに寝息をたてていた。

時計は12時を指していた。

空を見ると満月と星達が必死に自己主張をしていた。



## 第20話 星と月と黒い海

そつえば昔 星と月が人間だったらとか考えて小説書いたことあったっけ。

そんなことを思いながら、冬用の毛布を引っ張り出した。

床にしいて寝転がる。

月が女で星が男だった。

男は1人で輝いて でも光が地球に届いてるうちに死んでることがあつて。

月は1人じゃ輝けなくて でも1つしかなくて。

ぼんやりと考えるうちに眠りについていた。

目が覚めると、布団の中にマゼンダはいなかった。

「ん〜?」

目をこすって起き上がる。

部屋中を見回すと、マゼンダは俺の机に座っていた。

「・・・何してんの?」

「へ!!!?」

驚きの声を上げて、マゼンダが何かを落とした。

ドサッ!!

見ると、それは本だった。

「ん・・・?」

拾い上げて表紙を見ると、俺の本だった。

「げ!?!」

「ご、ごめん・・・暇だったから・・・」

「お前、字読めんの!?!」

「い、一応・・・難しい字は無理だけど、それは振り仮名あったから・・・」

俺は頭を抱えてため息をついた。

顔が赤くなるのがわかった。

よりによってこれ、初めて恋愛要素入れて書いたやつだし。

「言えやな・・・言ってくれれば隠したのに・・・」

「で、でも!面白かった!!」

「・・・うん、好評だった。」

『ブルース君の小説って、心情掘り下げて書くのに、恋愛物まだ書

いてないわね?」

『恋愛物書くと女の子が買っわよ』

そんな言葉にのせられて、初めて書いた恋愛物。

なんか凄く乙女なことかいた気がする!!

でも、思ってたよりも売上が良かったのを覚えてる。

『星と月と黒い海』

俺は苦笑した。

ちょうど昨日思い出してた小説だったから。

星が男で月が女。

黒い海ってのは夜で暗くなった空のこと。

ああ、題名からしてなんか乙女じゃん。

「ブルースの本って好き」

「・・・そお?」

「うん ブルースがいい人だって、凄くよくわかるから。」

そういえば その小説に書いた気がする。

『星はたくさんあつて。』

この世の男と女もたくさんあつて。

『その中で1人でも 見つけてしまったら』

『もうおしまいなんだ』 っ て

## 第21話 マゼンダとスーパーと狼

「・・・もう冷蔵庫、空になるからさ。今日はスーパー行こうか。」

俺が言うと、マゼンダはまた嬉しそうに笑った。

マゼンダは昨日買ったワンピースを着て、クロウに勧められたスパッツを履いた。

ドアを開いて外に出ると、マゼンダは背伸びをしてあくびをした。

「なんか、凄く気持ちいい！」

「ははっ ちゃんと荷物もちさせるからなー？」

「うん！もうなんでもする！！」

マゼンダはそういうと俺の手首をつかんだ。

なんとなくその感覚が心地よくて、笑ってしまった。

スーパーに入って食品を見る。

「何にすっかな・・・どうせあんまし食べないからな・・・」

そんなことを言っていると腹が小さく鳴った。

やっと空いたかこの腹は・・・

「・・・あのね、ブルース」  
「ん〜?」

マゼンダがまた俺の手首を握る。

「何、鳥のほうがいい?それとも魚がよかった?」

「そうじゃ・・・なくてね」

「へ?」

マゼンダのほうを見ると、マゼンダは床を見ていた。

クリーム色でつるつるした床は、マゼンダと喋ったりしないのに。

「私、ずっとブルースのところにいてもいい?」

「・・・え」

返事に困っていると、誰かが俺の後頭部を殴った。

「って・・・!?!」

後ろを向くと、そこには狼がいた。

マゼンダは震えて後ずさりした後、すぐに俺たちに背を向けて走り出した。

狼がマゼンダを追って走り出そうとするのと、俺が狼の腕をつかむのはほぼ同時だった。

「なんでお前が止めるんだよ!!」

狼は俺を睨んで怒鳴った。

もう俺も狼も、周囲の視線なんておかまいなしだった。

「俺は！マゼンダのことが好きだ！でもお前は昨日、そうじゃないって言っただろ！？」

「確かに・・・言っただけさ・・・」

「マゼンダが誰を好きかなんてわかるだろ！？でもお前がそんなじゃマゼンダは傷つくんだ！！」

俺の意見を聞かず、狼は怒鳴った。

「俺はそんなの嫌だ！だから止めるな！！」

狼はそう言っ、俺の反応を確認するように睨むとマゼンダを追いかけて走り出した。

数秒間立ち尽くした俺は、買い物かごを足元において同じように走り出した。

わからないことは山ほどあるし、問題だって山ほどあるけど

『お前がそんなんじゃマゼンダは傷つくんだ！！』

じゃあどんなんなら傷つかないんだよ？

お前なら傷つけずにいられるとでも言うのか？

そんなの 絶対に違う



## 第22話 私がいなくなった時のこと

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

とにかく走って逃げた

どこに行けばいいかなんてわからないし、ここがどこかなんてちつともわからない

もしかしたら同じところを行ったり来たりしてるかもしれない

全然わからないけど

とにかく逃げたかった

あの世界は私を鎖で縛ってて

どんなに抵抗したくても逃げることさえ許さなかった

だから どこかで諦めてた

だけど

こっちの世界にはブルースがいたから

もしかしたら逃げ切れるんじゃないか、って

もしかしたら私はこの世界の住人になれるんじゃないか、って

ブルースとずっと一緒にいれるんじゃないか、って

思ってたんだ

だけど

『私、ずっとブルースのところにいてもいい?』

ブルースは返事をくれなかった

ずっと一緒にいたいって思ってたのは私だけだったのかな

私と喋ったりしてる時も

笑ってくれてたときも

ずっとブルースは私になくなってほしいって思ってたのかな

私がいなくなった時のこととか考えてたのかな

涼しすぎて寒いところを抜けて、右に曲がると誰かにぶつかった。

「す、すみませ・・・」

顔をあげると、そこには息を切らしたブルースがいた。

私が口をぽかんと開けていると、ブルースは眉間にしわを寄せた。

怒られる と思い、目をぎゅっとつむると、ブルースは私の頬を軽くつねった。

「・・・へ？」

マヌケな声をあげてブルースを見ると、ブルースはため息をついて私の腕をつかんだ。

それから私をぐいぐいひっぱって、建物の外へ出た。

ブルースは私の腕を離さずに、無言で歩き続けた。

後姿じゃどんな表情かわからなくて。

怒ってるかどうかもわからなくて　なんだかこわい。

「ごめん・・・なさい・・・」

小さな声で謝ると、ブルースが足を止めた。

それから私のほうを向くと、またため息をついた。

「・・・勘弁しろよ」

「・・・ごめんなさい」

「本当に意味わかんない」

私は謝るのをやめて、下を向いた。

「何がずっと俺のところにもいい？だよ」

「！」

「なんでそういうこと聞くわけ？」

駄目に決まってるんだろ　って？

「あのな、俺だって血も涙もある人間だからな。」

「は？」

「いていいに決まってるだろ！」

「・・・いても いいの？」

「そう言ってるだろ！」

ブルースはまた私に背を向けて歩き出す。

私は慌てて追いかける。

「ねえ私、ここにいていいの？」

「・・・何度も言わない」

私は笑って、ブルースの手首をつかんだ。

ブルースの手首が好き

あつたかくて 脈があつて

心地いい。

私、ブルースのこと大好きだよ。

そばにいとと凄く安心するから。

こついのつて なんていうんだろ？

なんていう感情なんだろう？

ねえ、ブルース

ブルースも今 同じ気持ちでいてくれる？

## 第23話 暗い世界

それから 狼に会うことはなかった。

次の日の朝 目が覚めるとブルースは床で寝てた。

起き上がって寝顔を見ると、ブルースは寝返りをつつて私に背を向けた。

ごめんね ブロント

ブロントのこと嫌いになったわけじゃないよ

けどね

それ以上に この世界にいたいって思うの

ブルースのいるこの世界にいたい

だから ごめんね・・・

ブルースに触れようとした瞬間、甲高い音が鳴り響いた。

ピンポーン・・・

ビクッと体を震わす。

同時にブルースのまぶたがピクリと動いた。

ピンポーン・・・

また鳴って、少し遅れてブルースが起き上がった。

私が慌てて離れると、ブルースは私のほうをちらっと見ただけですが、背を向けて玄関へ向かった。

ほっとしたような、寂しいような。

小さくため息をつく、ブルースがいつの間にかそばにいて、私の腕をつかんだ。

「やつべ・・・」

小さく言うと、ブルースは私を押入れの中へ入れた。

「・・・へ？」

「ごめん！しばらくここにいてくれ！！」

ブルースはそれだけ言うと押入れを閉めた。



中は暗くて、少し怖かった。

ガチャッ

ドアの開く音がした。

「どうもー毎度ーリンさんですよー!」  
「・・・どーも」

女の人・・・?

ドクン、と 心臓が重たくなった。

「メールで原稿受け取ったから読んであげたけどさー」

「読んであげたってなんスか・・・」

「アハハッ ま、いんじゃない? 面白かったよ。売れるんじゃない?」

何の話 してるんだろう・・・

私には全然わからない。

なんだか聞きたくなくなって、私は戸に耳を押し付けるのをやめた。

しばらくすると、押入れが開いた。

「悪い、マゼンダ・・・その・・・出かけなくちゃいけなくなつたからさ。留守番してて？」

「え・・・」

「たぶん、すぐ戻るから」

ブルースはそういうと、また押入れを閉めた。

慌しくドアを閉める音が聞こえた。

暗い世界に取り残される

何もない私だけ　１人きりで。

## 第24話 欲張りとおしまい

そっと押入れから抜け出すと空っぽの部屋が広がっていた。

ブルースのいない空っぽの部屋。

少し甘いにおいのする部屋。

立ち上がって、ブルースの机の本棚に並んだブルースの本に触れる。

バサバサバサッ！！

何冊かが勢いよく落ちた。

慌てて拾いあげる。

たくさんの文字が模様みたいに並んでる。

本当はこんな細かい字を読むのは大嫌い。

けど

ブルースの本なら読みたいって思うんだ

優しい本だから

大好きになれるんだ

『人間は欲張りだって言うけれど・・・・・・・・・・』

ブルースの言葉

「・・・・人間って欲張りなんだ」

じゃあ私はどうなんだろう？

欲張り　なのかな？

きっと私は人間じゃないけど

私って　欲張りかな？

ブルースにも人生があって

もしかしたらこの先私は邪魔になるかもしれない

だけど

ブルースと一緒にいたいって思う気持ちは欲張りなのかな？

こんな気持ち 知らなかった

知らないほうがよかったかな

こんな気持ち

自分じゃどうしたらいいかわからないよ

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「くそお・・・リンさんの奴・・・」

俺はぶつぶつと怒りの独り言をつぶやいた。

リンさんっていうのはさっき家に来た女の人で、俺の小説の世話をしてくれてる人。

俺が本を出す前からの担当さんで、なかなか世話になってる。

年齢が結構近いもんだから結構親しみやすく、前から打ち合わせは外が多い。

ちなみに、クロウの彼女さん。

いや、実際今日になって発覚したんだけども。

「あの昼間から酒飲んでしかもすぐ酔ってすげえ扱いになることクロウにはらしてやるうか・・・」

大きくため息をついて家の鍵を出し、ドアを開ける。

するとそこには床に座り込み、床に広がった俺の本を眺めてるマゼンダがいた。

読んでるんじゃない 眺めてる。

「・・・マゼンダ？」

名前を呼ぶと、ようやく俺が帰ってきたことに気づいたらしく驚いた表情で顔をあげた。

「あ・・・おかえり・・・なさい・・・」

「ただいま・・・どうしたんだ？俺の本なんて広げて」

床に落ちた本を拾い上げる。

「・・・別に 落ちただけだよ」

マゼンダはそういうと、開いてる俺の本を閉じていく。

1冊だけ、俺のあんまり気に入ってない本だけ閉じてても俺に渡さない。

現実的で、しかも主人公をマイナス思考な奴にしよう と思っただけ必要以上にマイナス思考になってしまった。

書いててもテンションが下がった。

マゼンダはその本の表紙をじつと眺めた。

背景が黒くて 様々な色の円が書かれて重なり合ってる表紙。

「マゼンダ？」

「・・・私、元の世界に戻ろうかな」

「え？」

マゼンダは俺の本の表紙を見つめたまま言う。

どうして急にそんなことを言うのか俺にはわかるわけなかった。

「だって、ブルースに迷惑かと・・・思ってる」

なんでいまさらそういうこと言うんだ？

眉間にしわを寄せてしゃがみこんだ。

「ここにいたいっていうのは私のわがままで・・・ブルースのしたいことの邪魔になるかもしれないし・・・」

「はあ？」

「だってブルース、優しいし・・・だから私にここにいていいって言っただんじやないの？」

『ここにいていい』というよりもむしろ・・・

「あのさ、急にそういうこと言われても困る」

「困るって・・・なんで？」

「や・・・だって・・・」

あれ？そういえばどうしてだっけ

いなくなっただけじゃないって思うけど

でも理由なんてそんなの・・・

「お、俺のことはいんだよ！お前、戻りたいなんて思っただろ？」

「そりゃ・・・戻らなくてもいいなら戻りたくないよ・・・でもブルースの迷惑になりたくないし・・・」

「ちよ、こっち見て！」

俺はマゼンダの腕をつかんでこっちを向かせた。



人の目を見ればわかるんじゃないかと思ったけど、俺には全然わからなかった。

そもそも俺、人の目見るの苦手なんだった。

目を逸らしたくなるのを必死に耐える。

マゼンダは耐えてるようには見えなくて、ただ俺の目を見つめていた。

本当はそんなこと考える時じゃないのに、マゼンダの目は綺麗だった。

ごちゃごちゃ考えながらも、俺は目を逸らさずにいた。

そのまま沈黙が続いて、先に目を逸らしたのはマゼンダだった。

「……………ごめん、なんでもない」

「え？」

俺がマヌケな声をあげると、マゼンダは俺に本を渡した。

「忘れていいよ。」

何を考えているのか、それだけ言うとマゼンダは俺の机に座って本棚を眺め始めた。

俺は本を持って立ち上がり、本棚に本をおさめた。

「……………忘れるけど」

マゼンダのほうを振り向くと、マゼンダはじつと俺を見上げていた。

「でも俺、マゼンダは『ここにいてもいい』なんて思っ  
てない」

「確かにそういう風に言っただけ、『ここにいてほしい』の方が正しい」

そういった直後、俺は顔が赤くなるのを感じた。

かーっと顔が熱くなってる。

また本棚のほうを向こうとした瞬間、マゼンダがあ  
の嬉しそうな笑顔を俺に向けた。

『星はたくさんあって』

『その中で1人でも見つけてしまったら』

『もうおしまいなんだ』

どうして違っだなんて思ってたんだろう

どうして否定しようとしてたんだろう

見つけてしまった

ああ

もう おしまいだ

## 第25話 再びスーパー

本棚のほうを向いた後、思い出す。

「あ」

「へ？何？」

「・・・スーパー行つたのに、結局何も買つてねえ」

俺が言うと、マゼンダも思い出したらしく笑い出した。

そうだった 狼に邪魔されたから・・・

「じゃ、買いに行くから留守番してて。何もいじるなよ！本は読んでもいいけど・・・」

「いや！」

言い終わらないうちに、マゼンダがきつぱりと言う。

「私も買いに行く！留守番なんてやだ！」

俺は思わず笑ってしまった。

子供か？こいつは。

そんなにいい世界じゃないのに。

「・・・お前の場合、悪いところ知らないからか。」  
「え？」

ただ 自由な世界って思ってるのか。

「いやいや、なんでもない。じゃあ行くか」

ため息をついて立ち上がり、家を出る。

マゼンダも慌てて靴を履いて出てくる。

スーパーに着くと人は少なかった。

近くにもっと大きなスーパーがあるから、そっちに流れているんだろつ。

こっちのほうが安いけど、向こうの方が品揃えがいい。

ま、俺の基準は質より値段だからな。

「さすがに腹減ったな」

「はらへった？」

「あー、なんて説明すればいいかな。何か食べたいって思うんだよ。腹に何か違和感があんの。」

腹のほうを指差して言うと、マゼンダは眉間にしわを寄せた。

理解できないらしい。

そりゃ腹が減らないんだから理解できないよな。

「まあ、マゼンダの腹のほうが経済的だけだな」

そう言って笑うと、マゼンダはますます眉間にしわを寄せる。

「何食べたいかなー」

大きな棚には大きく赤い数字がいくつも書かれていた。

普段と値段変わらないくせに。

俺は生でも食べれるトマトなんかをカゴに入れた。

適当に買っていくと、スーパーを一周した頃にはカゴの中がいっぱいになってた。

「ま、当然荷物運びすんだろ？」

俺が言うと、マゼンダは大きく頷いた。

「よっブルース！」

聞き覚えのある声に、俺はゆっくり振り向いた。

そこにはクロウがいた。

しかも、リンさんと一緒にいる。

「あら、ブルース君！」

「・・・さっきの人？」

マゼンダがリンさんを指さす。

リンさんがきよとした表情で俺とマゼンダを見比べる。

ああ、声でわかったのか。

リンさんがきよんとするのはしょうがない。実際に会ってないんだから。

「えっと・・・この子は誰？」

「あー・・・」

説明に困っていると、クロウがにっこりと微笑む。

それからリンさんに見えないように素早く俺の腰の皮を強くつまんで言った。

「ブルースの、妹ですよ。」

妹！？

思わずクロウを睨むと、それ以上に怖い目で睨まれる。

「へえ、妹さん！」

「え？」

「初めましてー！ブルース君の小説の担当をさせてもらってます。リンです」

「え・・・あ！」

どうやら何か誤解が解けたらしく、マゼンダは目を大きく見開いて俺のほうを見た。

そんな目で見られても何を誤解してたのかわからないから困るんだ  
けど。



## 第26話 ブルースとテニスとティンク

「そうかそうか 仲良くお買い物か！」

俺の腰から手を離れたクロウがわざとらしく言う。

「いや、兄妹仲良くしてるのはいいことだと思うよ！うん！」

「あー・・・うるさ・・・」

「それにしてもクロウとブルース君が友達とはねー！」

リンさんが睨みあう俺とクロウを交互に見ながら言う。

こんな表情の2人でも『友達』と思うリンさんってある意味凄いか  
もしれない。

「じゃ、お邪魔かと思えますんで俺とマゼンダはレジへ行きますー」

「いやー！邪魔なんて！」

クロウはそういいながら今度は俺の足を思い切り踏む。

なんで俺がこんな立場にならなくちゃいけないんだ！！

「ねえ、これ誰？」

場の空気を読めない女が1人いた。

マゼンダが棚にぶら下がったポスターを指差す。

そこにはテニスウェアと着て、ラケットを持ってなにやらポーズを

決めた漫画っぽい男の子が書かれていた。

「ああ、テニス漫画の主人公だね。」

「てにすって・・・」

マゼンダが俺のほうを見る。

「あ！ブルースって昔やってたんだろ？テニス！」

「あー、私知ってる！お兄さんが県で1番とかで・・・」

そこまで言って、クロウがリンさんの腕を自分の腕でつつく。

『禁句だ』と言いたげだった。

どうしてそういうのを俺の見えないところでしないんだろう？

「も、もうしないのか？」

「しない」

冷たく言うと、クロウが顔を引きつらせる。

リンさんは目を泳がせ始める。

言いだしっぺなマゼンダは俺達3人を何度も順番に見ていた。

「あ、そ、そういうええ！うちの編集部の男の人でテニスクラブやってる人いるわよ！」

「へー！それに行けばいいじゃん！」

「誰が行くか！」

俺はすっかり不機嫌になった。

「マゼンダ、帰ろう」

「え？」

俺はマゼンダ達を置いてレジへ急ぐ。

どうして俺がこんなにイライラしなきゃいけないんだ！

なんで気を使われなきゃいけない！？

どうしていまさらテニスなんてしなきゃいけないんだ！

どうせまた兄貴の話になるだけなんだ！

「どうして？すればいいじゃん！テニス！」

「・・・したくない」

「なんで？だってブルース、まだテニスが好きだって・・・」  
「言っただけ！」

少し大きな声で言って、同時にレジにカゴを置く。

レジのパートっばいおばさんは何事もなかったように商品をレジに通す。

「それとこれとは別なんだ」

テニスが嫌いなのじゃない

むしろ好きだ

できることならまたやりたい

だけど

「ブルース、またテニスするの？」

まただ

どうして今日は会いたくない人間に会った！！

また聞き覚えのある人間の声に振り返ると、そこには誰もいなかった。

が、このパターンを思い出し視線を下に向けると  
いた。

「久しぶりだね」

そこには、ティンクがいた。

俺の1つ上年上で、兄貴の彼女。

今どうか知らないけど、俺が兄貴とまだ一緒にいた頃は彼女だった。

「ふうん テニス、するんだ」

いつから聞いていたのか、ティンクは意地悪く笑った。

本当に性格が悪い。

顔が可愛いのは俺だって認めるが、どうして兄貴はこんな性悪を選んだのか。

これなら他の奴等のほうがよっぽどいいのに。

「馬鹿ねえ アンタのお兄さんに勝てるわけないじゃん」

「するなんて言ってるねえよ！」

「へえ？ 私には『したい』って言ってるように見えたけど」

思い切りティンクを睨みつける、

が、ティンクは全然びびったりしない。

むしろ楽しそうに口の端を持ち上げる。

この笑みがイラつくんだ。

「アンタは天才じゃないんだから」

「・・・それ、何度も昔聞いた」

「天才じゃないアンタが努力したってね、天才には勝てないの。」

ティンクは、さも楽しそうに笑って言う。

昔から何度も言われた。

俺は天才じゃない

兄貴は天才だけど。

凡人はどんなに努力したって天才には勝てない。

そんなのわかってる

兄貴にできないことはない

俺が兄貴に勝てるどころなんて 1つもない

## 第27話 天才と凡人と努力

「なんでそんないい加減なこと言うの？」

また空気の読めない女が喋り始める。

ティンクが『誰？』と言いたげな目でマゼンダを見る。

それでもマゼンダは黙らない。

俺も、黙らせなかった。

「天才じゃなかったら努力しちゃいけないの？努力もしちゃいけないの？」

「・・・貴方誰？」

「努力ができるのに、しちやいけないなんておかしいよ！」

マゼンダのいた世界は『努力』なんて通用する世界じゃなかった

努力したってしょうがないし、それどころか努力のしょうがない世界

「・・・彼女？」

ティンクが、俺のほうを見て言う。

「違う！」

俺が言うと、ティンクはまた楽しそうに笑った。

その笑みにまたイラついた頃、レジが終わった。

俺はカゴを持って机の上へカゴを置くと、袋の中に詰める作業を始めた。

「戻ってきたいなら戻ってくればいいよ！」

「・・・は？」

「また、壁を思い出せばいいよ」

ティンクは楽しそうに笑って、マゼンダの肩をたたいた。

「いいこと教えてあげる」

「え？」

「この子ね、100回以上お兄さんとテニスで戦って、1度だって勝てなかったの、1ポイントも取れなかったの」

ティンクはそれだけ言うと、俺達を置いて買い物始めた。

俺はティンクの背中を睨みつけた。

マゼンダはただティンクを不思議そうに見つめていた。

アイツは俺を挑発してテニスを始めさせて、俺をいじって楽しむつもりだ。

俺の敗戦記録を伸ばそうとしてるんだ。



テインクの挑発になんかのつてたまるか。

あんな奴、目の毒社会の毒だ。

## 第28話 久しぶりの運動

「ねえ、あの人誰？」

「・・・ティンクって名前で、兄貴の彼女。今は別れたかもしれないけど」

「・・・ふうん」

彼女とか別れたとかいう言葉の意味がわかったのかわかってないのか、マゼンダは納得したようにため息をつく。

「兄貴にそりやもう惚れこんでて、兄貴の前で隠してるかどうか知らないけど凄い性格が悪いんだ。

見てればわかるよな。ずいぶんな性格でな、俺を虐めるのが大好きなんだ」

「へー・・・」

「よく泣かされたもんだよ」

何を考えているのか知らないけど、ティンクはやたら俺を虐めてきた。

俺が半泣きにでもなればそりやもう楽しそうに狂ったように笑っていた。

数々の嫌がらせを思い出し、思わず大きなため息をつく。

ため息をつくときと幸せが逃げるっていうけど、俺の場合身の回りの人間全員が俺を不幸にさせるんだよな。

「ま、例外もいるけど」

俺は大きく膨れ上がった買い物袋を、口を開けて眺めるマゼンダを見て笑った。

重い荷物をなんとか家まで運んだ。

「あー、久しぶりに運動したー」

「運動っていうの？こんなの」

ぜえぜえ言う俺に対して、マゼンダはケロリとしていた。

「ずいぶん元気だな・・・あー、疲れた！」

台所に荷物を置くと、俺は床に寝転がった。

そんな俺を見てマゼンダが笑い出す。

マゼンダも台所に荷物を置いた。

「・・・ねえ　これ、なんで濡れてるの？」

マゼンダが俺に見せたのは溶け始めたアイスだった。

「うわ！！冷凍物があったんだっただ！」

俺はマゼンダの手からアイスを奪うと慌てて冷蔵庫の冷凍室に入れた。

「れいとうもの？」

「うん。こついつのつて溶けるから面倒なんだよなー食べるには楽  
なんだけど」

俺は仕方なく荷物を整理することにした。

とりあえず今から食べようと思うトマトとか魚なんかは出したまま  
で、冷凍物や豆腐を冷蔵庫に入れた。

マゼンダは冷蔵庫には無関心で、俺の机の椅子に座って俺の作業を  
眺めていた。

俺なんかより元気なのに手伝う気はゼロか・・・

## 第29話 トマトとようかん

荷物を整理し終えた俺は、トマトをパックから出して水洗いする。

それからトマトそのままむしゃむしゃ食べ始めた。

「あ、食べる？」

そう言つてトマトをマゼンダに差し出すと、マゼンダが困ったような表情をした。

「いや、大丈夫だつて。水洗いすれば食べれるんだよ。」

そういうと、マゼンダはトマトと俺を何度か見比べる。

それから首を縦に振るとトマトを食べ始めた。

ぼとりと汁が床に落ちる。

「あー！」

「残念。落としちゃ駄目なんだ。」

ニヤニヤしながら言つと、マゼンダが悔しそうに顔をゆがめる。

俺は笑いながらふきんで床を拭いた。

「・・・やっぱ、1人よりは楽しいな」

ぼそりと言つと、マゼンダが急に笑い出す。

「・・・何？」

「当たり前だよ！1人にいるよりも、2人のほうが楽しいよ！2倍になるんだもん！」

思わず噴出したけど、マゼンダはそんなことは気にしていなかった。

楽しいことが2倍、ね。

そういえばそんなこと誰かが本に書いてたっけ。

トマトを1パック食べ終わり、小さなようかんも一本食べ終わると俺の腹はだいぶ満足していた。

「美味しかった？」

ようやく1個トマトをこぼさずに食べ終わったマゼンダに聞くと、マゼンダは大きく頷いた。

マゼンダが何か言おうと口を開いた瞬間、携帯がなり始めた。

マゼンダの携帯のアドレスには俺以外のアドレスが入っていない。

だから俺のだとすぐに気づき、携帯を開く。

登録されていない電話番号。

「んー・・・」

まあいいか。

ピッ

「はいもしもし？誰だ？」

電話に出ると、聞き覚えのある男の声。

『もしもし、ブルース？久しぶり。』

「は？誰？名前言えよ」

電話の向こうで笑い声が聞こえた。

2人分の。

電話に向かって喋ってるのは男の声だけど、その向こうで女の声がする。

「わかんない？ルファだよ。」

「う・・・」

俺は思わず唸った。

どうしていまさらみんな俺に近づきたすんだ！

卒業してから1度も会ってないのに！

「ってことはその女の声は・・・ミドリか？」

「ピンポン！久しぶりだね！ブルース君！」

「君付けなんてすんな気色悪い！で、何の用だよいまさら。なんで

俺の電話番号知ってんの？」

早口に質問すると、また笑い声が聞こえた。

マゼンダが不思議そうに俺を見ている。

「いや、リンさんが退職するからさ。お前の小説の担当、俺になった」

「・・・は？」

リンさんが退職？

ルフアが新しい担当さん？

「え？ちよつと待てよ。なんで退職？お前、職業って・・・」

「リンさんのことは本人から聞いてよ。俺の職業？リンさんと同じ。リンさんの後輩だけど？」

世間って、なんて狭いんだ・・・

俺は大きいため息をついた。

「わかった！もういい！もう何も言っな！これ以上俺の頭を忙しくさせるな！」

俺はそれだけ言うと一方的に電話を切った。

それからまた電話がかかってくる前に、マゼンダが口を開く前に、リンさんに電話をかけた。





### 第30話 リンさんの退職

「もしもし!？」

「あ、もしもし〜ブルース君?どうしたの?」

「退職するってどういうことですか!なんでルフアが俺の担当に・・  
」

俺が頭を抱えると、電話の向こうからリンさんの笑い声が聞こえる。

その向こうでクロウの声も聞こえた。

「いやー実はさ、結婚することになっちゃって。」

「・・・・・は?」

ケッコン?

「・・・あの・・・おかしいこと聞きますけど・・・相手って・・・

」

「やだー!クロウに決まってるじゃない!」

結婚!?!クロウが!?!リンさんと!?!?

俺の頭は完璧に忙しくなっていた。

リンさんが退職で?

結婚?誰と?ああ、クロウとだ

なんでいきなり?

「なんで突然・・・」

「あーもしもし？電話変わったんだけど。」

「クロウ！どういうことだよ！」

「どういうことって・・・そういうこと？」

話にならん！と心の中で悪態をつき、俺はため息をついた。

「なんで急に結婚なんて・・・困る！」

「へえ、困るって何が？」

「急に担当が変わるなんて・・・しかもルフアだろ！？」

俺にとって担当ってのはかなり相性のいい人じゃないといけない。

だって俺の将来とか今度の生活に関わるわけだし、仕事絡みとはいえ結構会わなくちゃいけない。

そういう意味ではリンさんと俺は相性はよかったと思う。

お互い仕事の文句も言い合えたし、小説に関係ない話だってできた。  
ルフアが同じだとは限らないじゃないか。

「いいじゃん。同級生なんだからタメ口だし。話が尽きなくていいじゃん！」

「そういう問題じゃない！」

「まあまあ。しょうがないんだってーしばらくリン、仕事できないから。」

「はあ？なんで・・・」

電話の向こうでリンさんの笑い声が聞こえる。

どうやらテレビを見ているらしく、急にテレビの音が聞こえた。

クロウがリンさんが音量を上げたんだろう。

「リンが外国に行かなくちゃいけなくなっただ」

俺が何か言おうとした瞬間、テレビの音が聞こえなくなった。

「聞こえた？聞こえてない方が都合なんだけど」

クロウの言葉に、俺は電話の向こうにも聞こえるように大きくため息をついた。

「聞こえたよ。悪かったな」

「なんだ、聞こえたんだ。」

「で、なんで？」

「んー、ここから先は少し格好悪い話になるんだよなあ」

クロウの言葉を見捨て、俺は黙ってクロウが話し始めるのを待った。

するとクロウのため息が聞こえた。

「リンって、元々アメリカで生活したいって思ってたの。乙女の夢なんだってさ」

「へえ、理解できないな」

アメリカに行くのが乙女の夢？

どこが乙女的で何が夢なんだかわかんないな。

「で、俺としては行かせてあげたいわけ。そしたらこないだ向こうでの仕事先が見つかって、家も借りれることになった。」

「へえ　で？それと結婚とどういう関係があんの？」

「だって、結婚しないと駄目だろ」

だから、何が駄目なのかを聞きたいんだ俺は！！

「アメリカだぞ？考えてみるよー！どうやって連絡取れっての？国際電話なんて金の心配がさー」

「いや、お前もアメリカ行けば？」

「さらっと簡単に言うけど、バイト生活の俺にそんな金あると思う？向こうでの仕事はどうすんの。」

俺は思わず苦笑してしまった。

そういえばそうだったな。

「ってなると俺は日本、リンはアメリカになるの。でも、これから先ずっとそんなに離れてたら何もかも離れちゃうじゃん」

俺には、リンさんよりもクロウのほうがよっぽど乙女っぽいように思えた。

リンさんの『アメリカに行きたい！』という夢よりも、今のクロウの乙女的発言のほうがよっぽど乙女だよな。

「だったら結婚して縛り付けとけばいいかなって。」

「お前、結婚は縄かよ！」

俺のツッコミは無視された。

「とにかく、俺はこれからもっとバイト頑張って！資格取って、英会話やってアメリカに行く！」

見えないのに、クロウが強く拳を握り締めたような気がした。

俺は小さく噴出した。

みんな必死だな。

### 第31話 子供のルール

不意に、子供の頃を思い出した。

今でも俺は若造なんだろうけど、強いて言うなら学生の頃。

あの頃は恋愛がすべてだった気がする。

誰が好きとか、誰と誰がつきあってるとか、誰が誰に告白してふられたとか。

そういう話題が大好きな奴が多くて、俺もよくその中で笑ってた。

そういう話題が好きなくせにそいつのこと『調子に乗ってる』とか『生意気』とか言う奴も少なくなかった。

子供には『グループ』があった。

大人にだって派閥とかあるんだろうけど。

グループの中で1人彼女が出来るとソイツを避けたがった。

好きな子がいる の時点では面白がってからかうくせに、いざくっついてしまうと『生意気』と言い出すんだ。

子供には子供のルールがあった。

大人には理解できないかもしれない 子供だけの、誰が決めたわけ

でもないルールが。

俺もそれを知らないうちにでも守っていたし、守っていない奴を避けたりしていた。

別に避けなくたって何もなかったのに。

今思えばそれは、みんな気づいていなかったり気づいていたとしても認めたがらなかっただけで

その中には確かに『嫉妬』とか『ひがみ』が含まれていた。

けどあの頃の俺達の世界はそれを中心に回っていて、それがすべてで

どこか憧れていた気がする。

別に身近じゃない 遠いどこかの物語でもないのに。

そんな年頃なのに、兄貴に好きな女をとられてばかりじゃ俺だって根暗にでもなるさ。

実際、俺は高校生の時結構暗いほうだった。

本を読むのが好きで、図書館に籠るのが好きで。

お気に入りの作家がいてその人の本を読み漁って。



休憩時間は本を読んでて昼休憩は図書室にいて。

特別誰かと仲良くしたりしない。

そんなの中学生まででじゅうぶんだった。

もううんざりしていたのかもしれない。

子供のルールがもう嫌だったのかもしれない。

女子に『暗い』とか『話しかけ辛い』とか

そういうことを言われてる奴と同類だったかもしれない。

けどあの頃の俺の中心は、恋でも まさか勉強でも 当然友情で  
もなく、本だった。

本がすべてだった。

なんて高校生だろう と今は思える。

いろんな本

図書館の本棚に詰まれた本達

俺の胸をときめかすのは本だけだった。

他のものは所詮『他のもの』だった。

まあ、俺の世界を含む『世の中』というものはその『他のもの』を中心に回っていたのかもしれないけど。

友情物    論文物    恋愛物

なんだってよかった。

俺に苦手な本はなかった。

どんな本もそれぞれ違うものを持っていて。

そんなところも俺の胸をときめかすんだ。

本物の友情より    本物の恋愛より

本の中の友情と恋愛のほうが俺には純粹に見えた。

子供のルールなんておかまいなしな、純粹な友情と恋愛。

俺は電話を切ると、マゼンダのほうを見てため息をついた。

だけど今なら言い切れるんだ。

本を読んでいるだけじゃわからないときめきがこの世にはたくさんあるんだ。

### 第32話 ルファとファミレスとコーヒーゼリー

その後、リンさんがアメリカへと旅立った。

俺は特別見送りに行くわけでもなく、手紙や電話をするわけでもなく、クロウとだけ連絡を取っていた。

特に理由はないけど、リンさんとは連絡をとらなかった。

それから数日たち、俺はルファと久しぶりに会うことになった。

「じゃあ出かけるけど・・・家で大人しく待ってるよ。棚とかいじるな？台所にも行くなよ。」

「わかってるってば！ブルースの本読んでるから！」

「うん。じゃ、行ってくる」

「行つてらっしゃーい！」

マゼンダは俺の本を片手に、にこやかに手を振った。

リンさんが旅立って数日、そう。

言い換えれば、マゼンダのことが好きだと気づいて数日。

とはいえ、一緒に暮らしててそういうことを言っても気まずくなるだけだもんなあ・・・。

そんなことを考えてため息をつくとき、ルファとの待ち合わせ場所に着いた。

いつ行っても人のいるファミレス。

入ると、既にルファは座っていた。

「久しぶり！」

ルファはにっこりと営業スマイルで俺に手をふった。

「その顔やめろよ。気色悪い。」

「ひどいなー俺の営業スマイルだよ？」

だろうな、と短く言って俺も座った。

ルファはメニューを見てぶつぶつ言い出した。

「俺、コーヒー」

「じゃあ俺もコーヒーゼリー。」

「俺『も』じゃないだろそれ」

「いいのいいの！」

ルファはそう言って定員を呼ぶとコーヒーゼリーを2つ頼んだ。

「俺、コーヒーって・・・」

「こういうところ来たらなんかデザートみたいなもの食べるもんだよ！」

ルファはそう言ってニヤリと笑った。

まったく、とため息をついて水を1口飲む。

不意にルファの左の薬指の指輪が目に入った。

「なんだっけ、ミドリと結婚したんだっけ？」

「うん、新婚さん。うらやましい？」

「別に」

そう言っただけで苦笑すると、ルファが携帯を出して俺に見せる。

「じゃあ、これってデマ？」

携帯を受け取って、画面を見る。

そこにはクロウからルファへのEメールがあった。

『今日、久しぶりにブルースに会った！覚えてるか？

アイツ、今可愛い女の子と2人暮らしみたいだぞ！』

アイツは・・・。

またため息をついてルファに携帯を返す。

「いや、デマでもないけど・・・」

「けど、って？」

「別に、彼女とかじゃない」

「・・・は？彼女じゃない？なのに一緒に暮らしてんの？ブルースって妹とか姉とかいるっけ？」

「兄貴だけだよ。その・・・色々と事情があつて。」

俺はクロウに説明した時と同じようにマゼンダのことを説明した。

途中、ルフアは定員からコーヒージェリーを受け取りながらも俺のほうをじっと見て説明を聞いてくれた。

話し終わると、ルフアはコーヒージェリーを1口食べた。

「へーそんなことあるんだな。」

「しかも母さんも同じだとはな・・・」

「え？で、ブルースはその子のこと好きとかじゃないんだ？」

「ッ！！」

コーヒージェリーを飲み込もうとしてむせた。

そんな俺の動揺を見て、ルフアがにやりと笑う。

その表情は、悪巧みを考えた子供と同じ表情をしていた。

水を飲んで落ち着けると、俺はルフアを少し睨んだ。

「そんな顔するなよ。で、どんな子？可愛いってクロウが言ってたけど。」

「さあ？可愛いとかそういう基準わかんないし。」

「だよな！お前って本ばっか読んでたもんな！」

「そうだよ！」

俺は、もう開き直った。

そしてコーヒージェリーを大口で食べ始めた。

### 第33話 私の居場所

「そうそう、残念ながら仕事の話になるんだけどさ。」

「残念じゃない。そっちが本題だろ？」

ルファは苦笑すると、メモ帳を取り出した。

「えーと・・・今後の話なんだけどさ。」  
「ん？」

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

ぼーっとブルースの部屋を眺める。

ああ 私がこの世界に来て、もう結構たっ たんだな・・・

ブルースに会って、ブルースのお母さんに会って、クロウさんにリ  
ンさんにティンクさんに・・・

いろんなことあったなあ・・・

なんだかだるくなってきた、床に横になる。

部屋はしん、と静まり返っていた。

外も誰もいなくて、静かだった。



まるで、どこにも誰もいないみたいだった。

この部屋だけがどこかに取り残されたみたいだった。

世界はどこかで進んでいて、ここだけが放り出されたみたいだった。

「・・・ああ、そうだった」

この世界に逃げてきたところで、私はこの世界の人間にはなれないんだ。

いくつかの世界の中で、私はたった1人 取り残されてるんだ

望んでいたとはいえ、放り出されたんだ。

私はたった1人 取り残されてるんだ。

何もない 私が たった1人で。

あの世界から逃げ出したくしょうがなかった。

だからこの世界に来れたとき、凄く嬉しかった。

だけど

この世界は私のいるべき場所じゃない。

この世界に私はいるべきじゃないんだ。

この世界に私と同じ気持ちでいる人はいない。

あの鎖にまみれた世界で同じ境遇の人達と慰めあうのと

この自由な世界でこんな寂しい想いをするのと

どっちがよかっただろう？

どっちのほうがあったかな？

この世界に来たいって思ってたのに

ずっとそのことを信じてたのに

どうしてこんな気持ちになるんだろう

私の居場所は どころだろうか？

### 第34話 声をあげて泣く

「あー・・・口の中が甘い・・・」

帰り道、ぼそりと言って咳き込んだ。

コーヒージェリーを食べ終わった後、ルファが勝手に注文しだしてチョコアイスだとか色々食べてしまった。

無駄な出費を！！

それにしてもあのチョコアイスは結構美味しかったな・・・今度マゼンダと行くか。

家の鍵を出し、ドアを開けるとそこにはどんよとした空気のマゼンダがいた。

俺が家を出てから今の間に何があったんだよ。

「マゼンダ？」

俺に背を向けて床に座り込んでいるマゼンダの肩をぽん、とたたく。

マゼンダはピクリと体を震わせて振り向いた。

その目にはうつすらと涙が浮かんでいた。

予想外の反応に俺は何も言えず、しばらく沈黙した。

「ど、どうした？」  
「うっ」

俺が声をかけて肩に触れたせいか、マゼンダの何かスイッチが入ったらしく、急に涙がぼろぼろこぼれだした。

慌てて洗面所へタオルを取りに行き、マゼンダに渡すとマゼンダはタオルに顔をうずめた。

その間に自分の部屋をちらちらと見回す。

特に本棚が荒れているわけでもなかった。

とはいっても、マゼンダをこんな風にするようなものをかいた覚えなんてないけど。

「マゼンダ？どうした？」

顔をあげてタオルをぼーっと見つめるマゼンダ。

何が気に入らなかったのか、俺の顔をちらりと見た途端タオルを放り投げた。

「え！？」

「なんでこうなるの？」

「はい？」

「なんで私、1人になっちゃうの？」

マゼンダはそれだけ言ってまた泣き出した。

俺はただ 黙ってその様子を見ていた。

マゼンダが泣いている理由がわからないもどかしさ

やっと理解した感情

マゼンダは声をあげて泣いていた。

### 第35話 消えた人

それからマゼンダは、3日に1回ぐらい発作的に泣くようになった。理由を聞いてもマゼンダは答えない。

毎回俺は黙ってマゼンダを見ているしかなかった。

たまに肩をさすってやったり、タオルを渡してやるぐらいしかできなかった。

そんなのがしばらく続いたある日だ。

コンビニで牛乳を買って家に戻ると、マゼンダは床に座り込んでぼーっとしていた。

「ただいま」

「あ、お、おかえり」

どうしようか、と何度も考えるけど いつも結論は同じだった。

『俺にはどうしようもない マゼンダが理由とか話してくれたいのに。』

いつもこれが結論だった。

俺はため息をついて冷蔵庫に牛乳をしまった。

「・・・あのさ、マゼンダ」  
「んー？」

マゼンダがぼんやりとしながら返事をする。

俺が口を開くのと、ドアが勢いよく開くのはほとんど同時だった。

つまり

俺とマゼンダ以外の奴が家に入ってきたってこと。

「お前!!」

「・・・ブロント？」

まだぼんやりとした表情のまま、マゼンダが狼の名前をつぶやく。

前のような震えもなかった。

ブロントは、俺とマゼンダを交互に見て走り出した。

マゼンダに向かって。

「マ・・・ッ」

名前を呼ぶ前に

名前の持ち主は消えた。



狼がマゼンダの腕をつかんだ瞬間、部屋中が光に包まれた。

目を開けると、そこにはマゼンダも狼もいなかった。

マゼンダから奪ったずきんもマゼンダが着替えて洗濯し終わったワンピースも。

何もかも 消えていた。

初めから存在していなかったみたいに。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

フロントが入ってきた瞬間 私は前みたいに怯えなかった。

どうしてだろう

前みたいに体が勝手に震えるみたいなことが全然なかったんだ。

フロントがどうしようとしてるのかわかった。

だけど私が逃げる前にフロントは私の腕をつかんだ。

逃げる前じゃない

逃げようなんて考えなかった。

逃げようとしなかった。

逃げなかった。

「どうして・・・急に入ってきたの？」

「じゃあ、あのままアイツのところに行ったのか？」

「・・・・・・・・」

「・・・俺じゃないけど、アイツでもなかったんじゃないの?」

ブロントの言いたいことはちゃんとわかった。

だけど私は答えなかった。

ブロントは私に背を向けて歩き出した。

真っ白の世界で 私に姿が見えなくなるまで。

どうして私 どこにいても1人なの?

### 第36話 灰になった世界とサミシイ

私の中で色づいていた世界は私の中で灰になった。

また私は真っ白な世界の中にいる。

自由だと思っていた世界

あの世界の中にいき、私は喜んだのに。

なのにどうしてこんな気持ちになるの？

「・・・ブルースのばか」

1人で呟いてみた。

その声も色づくわけもなく真っ白な世界に飲み込まれて消えた。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

何も残っていなかった。

『確かにここにマゼンダはいた』という証拠が何一つ。

ずきんもワンピースも携帯も。

何も残ってはいなかった。

俺の携帯のデータフォルダに確かに保存されたマゼンダの画像も。

何もかもが消えた。

俺の脳内に苦い記憶だけを残してマゼンダは消えた。

それでも俺は 元の生活に戻ろうとした。

前のように1日中家で本を読んだり小説を書いたりした。

たまに外に出て買い物もして、時々仕事関係者と連絡もとって。

クロウとリンさんにマゼンダのことは言わなかった。

ルファにだって言うつもりはなかった。

だけど、バレてしまった。

電話で『また打ち合わせしよう』と言われて断ると、それだけで勘

付かれてしまった。

だけど、俺以外にもマゼンダを覚えている人がいて少し安心した。

俺の夢なんじゃないかって思ったところだったんだ。

ふと、溜まった洗濯物のカゴの奥にマゼンダのために買った洋服があった。

「こんなの残して・・・どうすんだよ」

洗濯せずにしわくしゃになった洋服にぽとりと涙が落ちた。

今まで通りのはずなのに。

1人でこうしていたはずなのに。

ただ 元に戻っただけなのに。

どうしてだ？

1人に慣れてたはずなのに。

ずっと1人でいたのに。

なんでもさら・・・

『サミシイ』なんて・・・

### 第37話 真っ白な空

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

ただただぼおつと真っ白な空を眺めてた。

空って青いものじゃなかったっけ？

どうしてこの世界の空は真っ白なの？

ため息をつくとき、頭にこつんと何かがぶつかった。

振り返ると、そこにはブロントがたっていた。

「・・・ブロント」

「何してんだ？」

「何って・・・別に、することないじゃんか。こんなところで」

私が冷たく言うと、今度はブロントがため息をつく。

「・・・こんなところ戻りたくなかったのに。」

「じゃあ、あのままあそこにいたかった？」

私は黙って首を横に振って、また前を向いた。

あの場所にいたくはなかった。

あの場所にいたら自分が何なのかわからなくなる。



私はあの世界の人間じゃなくて

なんていえばいいんだろう？

自分がそこにいるのに、いたらいけないような気持ちになるときがある。

いたらいけないっていうか、いないような気もする・・・

「俺はここに帰ってきたかった。」

また振り向くと、ブロントは私の隣に来た。

「俺はアイツにマゼンダのこととられたくないって思ってた。この世界に、2人でいたいって思ってた。」

そんなこと言われても・・・

「・・・ッ私は！」

俯いて、吐き出すように早口で言った。

「こんな世界にいたくない！！戻りたくなかった！ブロントと・・・2人でいたいなんて思ったことない！私はブルースといたかった！」

はぁっと大きく息をつく　ブロントは私の頭にぼん、と手を置い

た。

「だろうと思った。」

ブロントの言葉に驚いて顔をあげると、ブロントは笑ってた。

この世界にいたくない

でもあの世界にもいたくなかった

あんな状態で あんな気持ちで

あの場所に存在しなくなかった。

存在しなきゃいけなかった気がした。

だけど

1つだけ

「・・・ツブルスと一緒に・・・いたかった」

「・・・うん。本当は、結構前から気づいてた。」

「え？」

ブロントは私のほうを見ず、横のほうを見ていた。

「俺さ、あの世界についてからずっとマゼンダ達のこと監視してたんだ。」

アイツの家のドアで聞き耳たててみたり、2人が外出したらつけてみたり。」

それを世間ではストーカーというけれど。

「だからずっと前から、マゼンダのことは気づいてた。」

「・・・私の、こと？」

私が聞くと、ブロントは口を開きかけてすぐに閉じた。

それから続きを言わずに、につこりと笑った。

「ごめん、教えない。」

「へ？」

「ここで教えちゃったら少し悔しい。」

答えて、ブロントの言葉の意味を私が理解するのはもう少し先だった。

### 第38話 おばあさんと気持ち

プロントと話した後、私は久しぶりに『赤ずきん』の童話のおばあさんに会った。

おばあさんは私の話を聞くと満足気に微笑んだ。

「そう、そんなことがあったの。」

「うん。」

「赤ずきんは、楽しかった?」

私は少しだけ黙っておばあさんの顔を見た。

おばあさんは、私が黙っても返事を待つてににこにこしていた。

「・・・うん」

そう言つて微笑むと、おばあさんは『そう』と言った。

「私ね、ずっと気がかりだったのよ。」

「何が?」

「貴方にあの話をしてよかったのかどうか。『赤ずきん』にあの話を  
してよかったのかどうか。」

「・・・よかったんだよ」

「そう、ならいいの。」

私とおばあさんはしばらく黙っていた。

その沈黙の間、おばあさんが何を考えてたのかわからない。

だけど私は、ブルースのことを考えてた。

ブルースに会いたい。

でもあの世界にいたかったとは思わない。

どうしてだろう？

どうしてブルースに会いたいんだろう？

「でも、残念だわあ」

「なにが？」

「だって、『マゼンダ』はその男の子のこと好きだったんでしょ？」

「・・・え？」

「今、貴方は『赤ずきん』だからどうだかは知らない。でもね、さつき貴方が話したのは『マゼンダ』の話でしょ？」

私は黙って頷いた。

「私が思うに、『マゼンダ』は男の子のことが好きだったんじゃないかしら？だから・・・」

おばあさんが言う前に、私の目から涙がぼろぼろと流れた。

そんな私を見ておばあさんはただ微笑んだ。

ああ　そっか

簡単なことだった。

どうして気づかなかったんだろう？

おばあさんに言われるまで気づかなかった。

### 第39話 クロウは嘘が下手

\*\*\*\*\*

本棚の隅に、少ししわのできた絵本があった。

それは赤ずきんの絵本。

あの中にマゼンダがいる。

だけど俺はそれを見て見ぬふりをした。

マゼンダをまたこの世界に引き戻してどうする？

どうするつもりだ？

絵本の背表紙を眺め、俺はため息をついてパソコンの電源を入れた。

カタカタとキーボードの音が響く。

ピンポーン・・・

キーボードの音だけの俺の部屋にインターホンが鳴り響く。

俺は舌打ちをするとドアの向こうを覗き込む。

そこにはクロウが立っていた。

帽子をかぶっていたけれど、俺がクロウを見間違っわけがない。

俺はまた、ため息をついてドアを開けた。

「よっ　なんか顔が険しいぞ！」

「・・・何か用か？」

「ひでー！どうせ元気ないんだろうから優しい俺が励ましに来たんだろー！？」

クロウはそういつとずかずかと家に入りこむ。

俺はクロウの背中を1度睨んだが、すぐにやめた。

悪気があるわけじゃないだろうし・・・ん？

「お前、なんで俺が元気ないと思ったんだ？」

「・・・え？」

クロウがビクツと体を小さく震わして俺のほうを見た。

俺は眉間にしわを寄せてクロウを壁へどんどん追い詰める。

クロウは『なんだよー』と笑ってはいたが顔が引きつっていた。

「なんでだ？」

「い、いや・・・その・・・リンがいなくなったから寂しく・・・」

「嘘だな。」

「う・・・」

俺がきつぱりと言うと、クロウは否定もせずにはんて返した。



ふと、ルファの顔が浮かぶ。

「ルファか」

「え!？」

図星らしく、クロウは額にじわりと汗をかき始めた。

この男はいつも堂々としてゐるくせにどうしてこう、嘘が下手なんだろう？

#### 第40話 聞かなきゃ言わなきゃわからない

「……………ッもういいんだって。」

「もういいってなんだよ!!」

「…………あの時、マゼンダは逃げなかったんだよ。てことはこの世界にいたくなかったんだ。」

俺と一緒にいたくなかったんだ」

俺が一気に吐き出すと、クロウは俺を睨んでいた。

それでも訂正する気にはならなかった。

だってそうだろ？

抵抗しなかったってことは別の世界に戻りたかったんだ

俺のそばにいたくなかったんだ

「お前、本人に聞いてないんだろ？」

「え？」

「そんなの、本人に聞かなきゃわかんねえじゃん!!」

俺もクロウを睨みつけた。

クロウは目を逸らさず、じっと俺を睨んでいた。

「…………でも」

「第一お前、言っていないんだろ？好きだった！」

「・・・ああ、言っていない」

「言わなきゃ向こうもわかんない！聞かなきゃお前にだってわかんないだろ？」

俺は返事をせず、クロウに背を向けて床に座り込んだ。

クロウの諦めたような、呆れたようなため息。

とんとん、と歩く足音。

靴を履く音。

ドアの閉まる音。

俺は最後の音を確認すると首だけ玄関のほうを向いた。

あの時 マゼンダはあのドアの向こうから突然現れた。

俺も、本人もかなり驚いていた。

「・・・泣いたらかつこ悪いだろうな」

独り言を言って、1人で笑ってみた。

泣いたらごめん

それから赤ずきんの絵本を手にとって、表紙をめくった。

#### 第41話 まだ間に合う

\*\*\*\*\*  
\*\*

「・・・でもね、マゼンダはあの世界にいたくなかったの。でも一緒にいたかったの。」

「・・・そう」

「マゼンダはどうすればよかったの？赤ずきんに戻っちゃいけないかった？もう戻れない？もうだめなの？」

言ってる間に涙がぼろぼろと流れ出した。

もう 戻っちゃいけない？

もう だめになっちゃった？

あの時逃げようとしなかったから？

ちゃんと きちんとしなかったから？

私がしっかりしてなかったから？

「ブルースに・・・好きっていえなかったから？言って、伝わるの？私の知ってるような簡単言葉で足りるの？どれをつなげれば伝わるの？」

「・・・赤ずきん 大丈夫よ」

おばあさんはふふ、と優しく笑った。

「まだ間に合うはずよ。だってね……」

『きつとその男の子も……』

おばあさんの声はそこで途切れた。

ぐにやりと視界がゆがんで目の奥がズキッと痛んだ。

思わず目を瞑り、ふと目を開けるとそこには

ブルースがいた。

ブルースの家の中で、赤ずきんの絵本を持ったブルースがいた。

目が少し赤かった。

「……ブルース」

「久しぶり」

ブルースは笑ったり怒ったりせず、ただ無表情で私を見てた。

なんて言おうか考えてたのかもしれない。

短い静けさの後、口を開いたのは私が先だった。

「ッあのねー!」

言いたいことは山ほどあった。

だけど話しきる前に喋れなくなる気がした。

既に唇は震えてた。

泣き出しちゃったらごめん

でも 最後まで言うから聞いて

## 最終話 宝物の物語

トントントントン・・・

規則正しい包丁の音。

「・・・んー」

重たいまぶたをなんとか持ち上げて、起き上がる。

ぼんやりと台所の方を見るとマゼンダが料理をしていた。

「・・・ウィナー炒め？」

「正解！今起こそうとしたのに。」

そう言っマゼンダはにっこりと笑って振り返った。

あれから数ヶ月、マゼンダは料理やこっちの世界の生活に慣れてすっかり専業主婦みたいになっていた。

そのおかげか俺も規則正しい生活を送るようになった。

朝起きて夜に寝て。

3食ちゃんと料理したものを食べて。

なんとなく体調もよくなった気がする。

俺は朝特有のだるい体を起こして椅子に座った。



マゼンダがご飯やら味噌汁やらを机に置く。

「あ、そうだ。さっきルファさんから電話があつてね！」

「ん？ああ、そっか今日締め切りなんだった。」

「3時までに仕上がらないようなら5時にお泊りセット持っていくからそのつもりでよろしく！だって。」

俺は苦笑して牛乳を飲んだ。

「ちゃんと締め切りまでにやらなきゃだめだよー？ルファさんに迷惑かけちゃだめだよ！」

「いや・・・今まで締め切りギリギリだったことなんてなかったんだけど・・・今回はちよつと」

俺が言うと、マゼンダが首を傾げる。

「今回の小説、マゼンダがモデルの主人公なんだよ」

「・・・へ？」

「ルファがどうしてもかいてくれって。売れるって保証する！とか力説するからさ。仕方なく。」

「え？じゃあ、私のことかくの？」

マゼンダが自分のほうを指差して言う。

なんとなく恥ずかしくて本人に許可を取ってなかったんだ。

俺は小さく頷いて味噌汁の小さな豆腐を箸で2つに切った。

「すごい！嬉しい！！私、ブルースの小説大好きだから凄い嬉しい

い！！」

マゼンダはきゃあきゃあ言って笑う。

予想外の反応に、俺はもう少しで味噌汁をこぼすところだった。

マゼンダのことならまだしも、やっぱり自分とのも書かなきゃいけない。

そのせいかなんだか恥ずかしくてかくのをためらってしまい、執筆の進みが悪いんだ。

ラストがどうも決まらない。

別に全部実話にすることないんだから、バッドエンドにしたっていいわけだ。

どうしたものか・・・

「ねえブルース！」

「うん？」

「私もね、小説かきたいの！」

「え？」

「ブルースみたいな小説かいてみたいの。初めにかいたのはブルースにだけ読ませてあげたい。」

そう言ってマゼンダは照れ隠しに笑って味噌汁を飲んだ。

俺は笑って「ありがとう」と言い、急いでパソコンの電源を入れた。

時々俺は急にパソコンの電源を入れて小説を書き始める。

マゼンダはそれを知っているから、そんな俺の後姿を見てくすくすと笑った。

そして俺はすぐにメールでルファに原稿を送った。

本はすぐに書店に並び、今までの本よりも長い期間平積みされた。

長い長い 本当はまだ続きのある、ハッピーエンドの物語。

童話の世界と現実の世界と その世界の2つのスイッチの物語。

モノクロな童話の世界の赤ずきんの女の子と色鮮やかな現実の世界のモノクロの男の物語。

2つの世界を結ぶ物語だ。

俺達の宝物だ。

## 最終話 宝物の物語。（後書き）

後半、1日に何話も連続で投稿するようになり本当にすみませんでした。

長々とした小説となつてしまいましたが、楽しんでいただけたでしょうか？

というより、こんな小説に最後までおつきあいくださった方がいたでしょうか？

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございました。

この話は終わりですが、他の小説をしようと思っと思っていますのでよろしく願います。

シリーズにしてる短編小説やファンフィクションの小説もよろしくおねがいします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4323c/>

---

童話と現実の世界～2つのスイッチ～

2010年10月11日08時12分発行